

談話における指定文に関する総合的研究
－関連性理論，認知文法による考察－

課題番号 19520417

平成 19 年度－平成 20 年度科学研究費補助金
(基盤研究 (C) 研究成果報告書)

平成 21 年 3 月

研究代表者 加藤 雅啓
(上越教育大学 大学院学校教育研究科教授)

寄贈



はしがき

本書は、平成 19 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号 19520417「談話における指定文に関する総合的研究－関連性理論，認知文法による考察－」の研究
成果報告書である。

本研究の遂行にあたって本学研究協力室，情報基盤センター，及び関係各機関の協力に
対し謝意を表する。また，本研究に対して示された家族の協力と理解に感謝する。

研究組織

研究代表者 加藤 雅啓 （上越教育大学学校教育学部教授）

研究経費

平成 19 年度	700 千円
平成 20 年度	600 千円
計	1300 千円

研究発表

（学会誌，学術誌等）

1. 加藤雅啓「It 分裂文の焦点とモダリティ表現*－命題領域とモダリティ領域の認知転換
と総記的含意－」 *International Journal of Pragmatics*, vol. 17, 1-19.
日本プラグマティックス学会 平成 19 年(2007) 12 月
2. 加藤雅啓「It 分裂文の焦点に生じる付加詞と下接詞」上越教育大学研究紀要 第 27
巻 163-172. 平成 20 年(2008) 2 月
3. 加藤雅啓「ガ分裂文の談話機能」上越教育大学研究紀要 第 28 巻 119-130. 平成
21 年(2009) 2 月

目 次

第 1 章

- It 分裂文の焦点とモダリティ表現—命題領域と
モダリティ領域の認知転換と総記的含意— 1

第 2 章

- It 分裂文の焦点に生じる付加詞と下接詞 23

第 3 章

- ガ分裂文の談話機能 37

補遺 1

- 談話における日本語分裂文に生起する取り立て詞
「なかでも」データベース 53

補遺 2

- 談話における日本語分裂文に生起する取り立て詞
「とりわけ」データベース 61

補遺 3

- 談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞
only のデータベース 69

補遺 4

- 談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞
also のデータベース 77

補遺 5

- 談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞
just のデータベース 83

補遺 6

- 談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞
even のデータベース 89

第 1 章

It 分裂文の焦点とモダリティ表現*

－命題領域とモダリティ領域の認知転換と総記的含意－

It 分裂文の焦点とモダリティ表現*
— 命題領域とモダリティ領域の認知転換と総記的含意 —
It-cleft Sentences and Modality Expressions:
Cognitive Shifts in the Domains of Proposition and Modality,
and Exhaustiveness Implicature

加藤 雅啓
Masahiro Kato

上越教育大学
Joetsu University of Education

ABSTRACT

This article is concerned with the semantic functions of adverbials in the focus position of a cleft sentence in discourse. The main points argued are: (i) why frequency adjuncts as well as means, instruments, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, (ii) why acceptability of manner adjuncts, which cannot be the focus of a cleft sentence, is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative, and (iii) why some subjuncts can be the focus of a cleft sentence, while others cannot. We will investigate these issues in the framework of Nakau's (1994) theory of modality and from the viewpoint of exhaustiveness implicature observed in cleft sentences, and elucidate anomalous phenomena of cognitive shifts in the domain of proposition and modality.

0. はじめに

英語には、統語構造上、焦点位置が一定の位置に固定した構文がある。その典型的な例が it 分裂文である。it 分裂文の焦点となることができるのは、最も一般的には、名詞句であり、次いで前置詞句であるが、これ以外に定形節、不定形節、副詞、形容詞などの要素も焦点となることができる (Huddleston and Pullum, 2002: 1419)。焦点位置に生起できる副詞について、Quirk et al. (1985: 504) は "...and unlike other adverbials, an adjunct can be the focus of a cleft sentence:" と述べ、付加詞 (adjunct) は、他の副詞相当語句 (adverbial) と異なり、単独で it 分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (1) It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. (Quirk et al. 1985: 504)
 (2) It's *rarely/seldom* that he loses any money. (ibid: 548)
 (3) *It was *fairly* that he sprang at her. (ibid: 567)
 (4) *It was *completely* that he ignored your request. (ibid: 597)

(1)の *because of*, (2)の *rarely/seldom* は付加詞であるので, it 分裂文の焦点として生起できるが, (3)の *fairly*, 及び (4)の *completely* は下接詞 (subjunct)であるため, it 分裂文の焦点に生じることはいできない。ところが付加詞であっても, it 分裂文の焦点に単独では生起することができない例がある:

- (5) *It is *generally* that the theory is accepted.
 (6) *It was *usually* that she saw her patients in the mornings. (ibid: 546)
 (7) *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck. (ibid: 561)

(5)-(7)の *generally*, *usually*, *categorically* は, いずれも Quirk et al. (1985)では付加詞として分類されているが, it 分裂文の焦点位置に単独で生起することはできない。¹

これに関連して, Huddleston and Pullum (2002: 667)は, “The cleft construction allows a narrower range of elements to be focused than alternative questions and contrastive negation. For example, adverbs in *-ly* are less readily focused in a cleft:...”と述べ, 語尾に *-ly* を持つ副詞は分裂文の焦点になりにくいと指摘している:

- (8) Did they grow *quickly* or reasonably fast? (ibid.)
 (9) ?Was it *quickly* that they grew? (ibid.)

本稿では, 副詞相当語句 (adverbial)のうち, 付加詞と下接詞をとりあげ, どのような条件の下に it 分裂文の焦点として生起できるのか, 意味論, とくに中右 (1994)の階層意味論の立場, 及び認知語用論の立場から考察を進めることにする。

1. 階層意味論とモダリティ表現

1.1 中右 (1994)

中右 (1994)は, 文の意味の基本骨格はモダリティと命題内容からなる階層構造をなしている, とする階層意味論を展開している。モダリティは, ①話し手, ②発話時点, ③心的態度という3つの要素から成り立っており, 概略, 「発話時点における話し手の心的態度」ということばでまとめることができる主観的意味成分

のことである(中右,1994:42)。モダリティは、さらに「命題態度」を表す S モダリティと「発話態度」を表す D モダリティの 2 つのタイプに分けられる。命題態度とは、「命題内容の真理値(真か偽の値)について話し手が下す査定判断のことであるのに対し、発話態度とは、一定の談話コンテクストのものとで話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識(意図、姿勢)のことである(中右,1994:41)」と述べられている。命題態度は独立節としての文に内在的な義務的意味成分であるのに対し、発話態度は非義務的意味成分であり、いずれのタイプも命題の真偽値に関して影響を及ぼさないと規定されている。中右(1994)で展開されているモダリティに関する議論をまとめると次の表 1 になる：

表 1

モダリティ	
S モダリティ	D モダリティ
・ 定義：話し手が発話時点において全体命題 PROP ⁴ (の真偽いずれかの値) に対してとる信任態度 (コミットメント) のこと	・ 発話主体の態度表明、つまり発話・伝達態度のこと
・ 命題態度 (命題内容の真理値について、話し手が下す査定判断・信任態度) を表す	・ 発話態度 (談話コンテクストのもとに、話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識 (意図・姿勢)) を表す
・ 命題内容を限定する	・ 談話要因をもとに発話の在り方、伝達様式を限定する
・ 独立節としての文に内在的な義務的意味成分	・ 独立節としての文に外在的な随意的意味成分
・ 全体命題 PROP ⁴ を作用域とする	・ 構文全体、つまり S モダリティ + 全体命題 PROP ⁴ を作用域とする
・ 当該の言語表現を省くと同じ命題態度が保持されない	・ 当該の言語表現を省いても同じ命題態度が保持される

1.2 It 分裂文とモダリティ表現

中右(1994)は、焦点位置が固定している有標構文として it 分裂文を取り上げ、階層意味論の観点から次のように述べている：

(10) a. it 分裂文は統語論的には複文構造を形作っているにもかかわらず、意味論

的には全体で一つの独立節に相当する意味構造を備えている。

b. it 分裂文の全体命題 PROP4 の成分は、主節の焦点部分と従節の前提部分とに二分されている。

c. it 分裂文の主観的モダリティ成分は、前景の主節にのみ生じる。

d. それゆえ、主節の命題成分こそが文の焦点である。 (中右, 1994: 139)

(11) S モダリティは、それが作用域とする全体命題 PROP4 内の要素を焦点部位とする。ただし、その要素は語彙論的、統語論的、韻律論的、語用論的条件を同時に満たしていなければならない。 (ibid: 151-152)

(10)及び(11)を要約すると、①焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、S モダリティではないこと、②S モダリティはむしろ、焦点化を引き起こす要素、つまり焦点因子であること、それゆえ、③焦点化される命題内容成分はモダリティの焦点を形作ること、ということができる。これらのことをふまえたうえで、it 分裂文でモダリティ表現が焦点化されるか否かについて、次の例を挙げて論じている：

(12) a. In all probability, John disagrees with you.

b. *It is in all probability that John disagrees with you.

c. In all probability, it is John that disagrees with you. (ibid: 155)

(12)の各文において、全体命題を形作るのは、*John disagrees with you* の部分であるのに対し、*in all probability* の部分は S モダリティを形作っている。ここで、(12b)が不適格なのは、まさしくモダリティ表現が焦点化されているからである。その一方、(12c)が適格文であるのは、命題内容成分である *John* が焦点化されているからにほかならない。以下、it 分裂文の焦点位置に生起する副詞について、中右(1994)の議論を概観することにする。

1.3 時間副詞と it 分裂文

中右(1994)は、時間副詞が it 分裂文の焦点として生起できるか否か、ということに関して、統語的な制約ではこれを正しくとらえることができず、当該の時間副詞が命題内容成分であるか、あるいはモダリティ成分であるか、という意味論的観点によって初めてとらえることができる、と主張している：

(13) a. *It was yesterday John who replied politely.

b. It was usually John who replied politely.

(14) a. It was yesterday that John replied politely.

b. **It was usually that John replied politely.*

(ibid: 158)

(13a)と(13b), 及び(14a)と(14b)は, 統語的には全く同じ構造であるにもかかわらず, その適格性に相違があるが, これを統語論的制約でとらえることは困難である。これについて, 中右(1994: 158)は, 「焦点位置に生起可能かどうかの違いから, *yesterday* は命題内容成分なのに対し, *usually* はモダリティ成分であることがはっきりする。」と述べている。すなわち, *it* 分裂文の主節の焦点になることができるのは, 一つの命題内容成分だけである, ということができる。

1.4 頻度副詞と *it* 分裂文

中右(1994: 159)は, *always*, *often*, *occasionally* などのように頻度を表す副詞を頻度副詞と呼び, *usually* などの他の副詞と区別している。さらに, 次の例をあげ, 「頻度副詞は本来, テンス領域に帰属する命題内容成分である」と分析している:

(15) a. **Only usually did he reply politely.*

b. *Only occasionally did he reply politely.*

(16) *He did not always reply politely, but he did reply politely sometimes.*

(ibid: 158)

(15)から, *occasionally* は *Only* によって焦点化できるが, *usually* はそれができないことが分かる。さらに, (16)では, *always* と *sometimes* が対照の焦点となっていることが明らかである。これらのことから, 頻度副詞は命題内容成分として機能している, と指摘されている。この主張は, 次の例文によってさらに確証を得ることができる:

(17) a. (?) *It's very frequently that he loses money.*

b. *It's not often that have a chance to speak to him.*

c. *Is it often that she drives alone?*

(18) a. *It's all too frequently that people don't offer to help.*

b. *Is it very often that she doesn't speak to him?*

c. *It isn't very often that she doesn't speak to him.*

d. *It's not often that he doesn't help.*

いずれの例も, 頻度の付加詞が *it* 分裂文の焦点となっている例である。

1.5 強意副詞と it 分裂文

中右(1994: 160)は, *only, particularly, also, purely, chiefly, simply* などの副詞は, 焦点要素を限定する働きがあることから, これらの副詞を強意副詞と呼んでいる。強意副詞は, *it* 分裂文に生じるときは, 主節の焦点要素に付加的に隣接して生じるのが通例である, と述べている:

- (19) a. It was {*only/particularly/also*} John who protested.
b. It was *purely out of spite* that he assigned it that number.
c. It is *chiefly in this sense* that Berkeley denies matter.
d. It is *exclusively among the goods of the mind* that the value of philosophy is to be found. (中右, 1994: 160)

中右(1994: 160)によれば, これらの強意副詞は主節内に生じ, 話し手の主観そのものを反映しているため, D モダリティに分類される。したがって, (10)及び(11)から, これらの副詞は単独で *it* 分裂文の焦点に生じることとはできないと予測される:

- (20) a. *It was {*only/particularly/also*} that John protested
b. *It was *purely* that he assigned it that number.
c. *It is *chiefly* that Berkeley denies matter.
d. *It is *exclusively* that the value of philosophy is to be found. (ibid.)

1.6 時の副詞節と it 分裂文

中右(1994: 161)は, 時を表す接続詞は内在的に命題内容成分としての性質を備えているので, それが導く時の副詞節は *it* 分裂文の焦点位置に生じることができる, と次の例をあげて主張している:

- (21) a. It is *when we forget about the cultural side of our behavior* that we are most likely to be surprised or confused by the other person's behavior.
b. It's *since he began the research on his dissertation* that Bill has gone nuts.
c. It was *not until I got home* that I realized that I had lost my keys.
d. It was *only after I had come to the view* that I began to think a little more deeply about the connection between knowing and having. (ibid.)

いずれの例でも, 時を表す副詞節が節全体として命題内容成分としての性質を有していると考えられる。

1.7 理由の *because* と *it* 分裂文

中右(1994: 162)は、理由を表す *because* を巡って、極めて興味深い議論を展開している。*because* は潜在的にあいまいで、命題内容成分として客観的因果関係を表す場合と、D モダリティとして主観的推論関係を表す場合があるという：

(22) a. He is not coming to class *because he's sick*.

b. It's *because he's sick* that he's not coming to class.

(23) a. He is not coming to class, *because his wife told me*.

b. *It's *because his wife told me* that he's not coming to class. (ibid.)

(22)は「彼は病気なのでクラスに来ないよ」といっているのに対し、(23)は「彼はクラスに来ないよ、だって奥さんがそうっていたよ」と解釈できる。(22)の *because* 節は、病気が原因でクラスを欠席するという因果関係を述べており、これは定義上、命題領域に帰属する客観的関係を表していることから、命題内容成分である。一方、(23)の *because* 節は、モダリティ領域に帰属する主観的な推論関係を述べており、主観的推論関係を表す D モダリティ表現である。(22b)と(23b)の容認性の違いは、命題内容成分のみ焦点化できる、という(10)、及び(11)の一般化が妥当であることを示している、と中右(1994)は論じている。

以上、分析の対象となった副詞(節)を命題内容成分とモダリティ成分に分類してまとめたものが表 2 である：

表 2

副詞(節) 成分	命題内容成分	モダリティ成分
時間副詞	yesterday	usually
概括副詞		normally, generally
頻度副詞	always, often, occasionally	always, often
強意副詞 (焦点化副詞)		only, particularly, also, purely, chiefly
時の副詞節	when~, since~, until~, after~	
理由の副詞節	because(客観的因果関係)	because(主観的推論関係), as, since
複合接続詞	so that(目的節)	so that(結果節)

2. 領域の認知転換

中右(1994: 139, 151)は、(10), 及び(11)で明らかにしたように、焦点化されうる要素, つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない、と主張している。このことを it 分裂文にあてはめると、モダリティ表現は it 分裂文の焦点として単独で生起することはない、ということが論理的帰結として得られる。しかしながら、it 分裂文をよく見てみると、モダリティ表現が単独で it 分裂文の焦点として生起している例がある：

(24) It was *casually* that Leslie greeted the stranger. (Quirk et al., 1985: 574)

中右(1994)にしたがえば、*casually* は、定義上、D モダリティであり、単独では it 分裂文の焦点位置に生じることはいかなるはずである。しかし、この例をもって、(10), 及び(11)で提示した「焦点化されうる要素, つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない」という一般化を棄却するには早計である。

すでに 1.4 節で概説したように、頻度副詞は、本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である。しかし、頻度副詞がモダリティ成分として it 分裂文の焦点位置に生じている例がある：

(25) a. It is *always* oneself that one encounters in traveling.

b. It is *often* your children that howl during the night. (中右, 1994: 159)

(25)では、*always*, 及び *often* は命題内容成分ではなく、モダリティ成分として機能している。これについて、中右(1994: 159)は、「理論的には、命題領域からモダリティ領域への認知転換が起こっているとみたい」と述べている。

しかしながら、中右(1994)は、命題領域からモダリティ領域への認知転換について、これ以上踏み込んで議論をしていない。実際には、頻度副詞は無条件で認知転換が可能であるわけではない。本稿では、どのような条件の下に命題領域からモダリティ領域へと認知転換がなされるのか、5 節, 及び 6 節であらためて議論をすることにする。

3. 付加詞の焦点化

モダリティ領域と命題領域への認知転換について論じる前に、it 分裂文における付加詞、及び下接詞の焦点化について、Greenbaum (1969), Quirk et al. (1985)における分析を概観することにする。

3.1 頻度付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 547) は、“Most frequency adjunct can be the focus of a cleft

sentence, particularly if they are modified or are in a negative or interrogative focal clause.”と述べ、頻度の付加詞の多く、とくに他の要素によって修飾される、あるいは否定や疑問の焦点（節）である場合は、分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (26) a. (?) It's *very frequently* that he loses money.
b. It's *not often* that have a chance to speak to him.
c. Is it *often* that she drives alone?
- (27) a. It's *all too frequently* that people don't offer to help.
b. Is it *very often* that she doesn't speak to him?
c. It isn't *very often* that she doesn't speak to him.

(26a)は、頻度の付加詞 *frequently* が他の副詞 *very* に修飾され、it 分裂文の焦点となっている例である。(26b), (26c)は、いずれも頻度付加詞 *often* が否定、あるいは疑問の対象となり、it 分裂文の焦点となっている例である。(27)の例も同様である。

3.2 様態の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 561)は、“Normally, when manner adjuncts are realized by adverbs, they cannot be the focus of a cleft sentence, but their acceptability is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative.”と述べ、副詞として具現化された様態の付加詞は、分裂文の焦点にはなれないが、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合は、容認性が向上すると指摘している：

- (28) a. *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck.
b. ?Was it *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck?
- (29) a. ?It's *in the French style* that they cook.
b. It isn't *in the French style* that they cook.
- (30) a. ??It was *violently/loudly* that they argued.
b. (?)It was *so very violently/loudly* that they argued.

(28a)は、様態の付加詞 *categorically* が it 分裂文の焦点に単独で用いられている例であるが、不適格となっている。しかし、(28b)では、焦点として *categorically* が

用いられているが、it 分裂文が疑問化されているため、容認性が向上している。(29)も同様である。(30b)では、修飾要素 *so very* が付加されることによって容認性が改善することが見て取れる。

3.3 手段・道具・動作主の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 562)は、“...means, instrument, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, even as realized by single adverbs (though less idiomatically in these circumstances)...”と述べ、手段・道具・動作主の付加詞は単独で用いられた場合でも、it 分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (31) a. It was *with a bullet* that he was killed.
b. It was *by a terrorist* that he was killed.
c. It was *intonationally* that these linguistic units were separated.

(31a)は手段の付加詞、(31b)は動作主の付加詞が、(31c)は手段を表す付加詞が、単独で it 分裂文の焦点として用いられている例である。

本節では、頻度付加詞、及び手段・道具・動作主の付加詞は、単独で it 分裂文の焦点になることができ、様態の付加詞は、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、あるいは否定の焦点となる場合は、it 分裂文の焦点になることができる、ということを見てきた。

4. 下接詞の焦点化

4.1 下接詞の統語的特徴

Quirk et al. (1985: 566) は、“they (=subjunct) cannot usually be treated grammatically in any of the four ways stated in 8.25 as being applicable to adjuncts.”と述べ、下接詞は、付加詞が持つ主語、目的語、補語と同様な統語的特徴を持たないと指摘している：

- (32) a. *It was *fairly* that he sprang at her...
b. *Did he spring at her *fairly* or...?
c. *He only *fairly* sprang at her...
d. *[How did he spring at her...?] **Fairly*.

下接詞である *fairly* は、(32a)-(32d)に見るように、it 分裂文の焦点となることができず、選択疑問文の選択の対象となることもできず、また、焦点下接詞 *only* の焦点となることもできず、さらに、疑問の対象となることもできない。次の例に

見るように、下接詞に分類される増幅詞(amplifier)の *completely* も *it* 分裂文の焦点となることはできない：

(33) *It was *completely* that he ignored your request. (Quirk et al., 1985: 597)

4.2 下接詞から付加詞への転換

Quirk et al. (1985: 573-574) によれば、すべての下接詞が *it* 分裂文の焦点となることができないというわけではなく、主語指向 (subject-oriented) の下接詞は、付加詞として解釈することができ、*it* 分裂文の焦点として生起できるものがある、と指摘している：

(34) a. Leslie greeted the stranger *casually*.

['in a casual offhand manner', his greeting was casual]

b. *Casually*, Leslie greeted the stranger.

['Leslie was casual, offhand, when he greeted the stranger']

(35) It was *casually* that Leslie greeted the stranger.

(34a)では、*casually* は付加詞として「気楽に、あるいは何気ない方法で」という様態の意味に解釈され、(34b)では、下接詞として主語である Leslie の属性に言及し、「ぶっきらぼうに、あるいはぞんざいに」という意味に解釈される。(35)は、*casually* が付加詞として解釈されるため、*it* 分裂文の焦点として生起することができることを示している例である。

5. 命題領域とモダリティ領域の認知転換

5.1 命題領域からモダリティ領域への認知転換

Quirk et al. (1985)にしたがい、3 節では、頻度付加詞、及び手段・道具・動作主の付加詞は、単独で *it* 分裂文の焦点になることができるが、様態の付加詞は、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合には、*it* 分裂文の焦点になることを確認した。4 節では、下接詞は、原則として、*it* 分裂文の焦点になることはできないが、主語指向の下接詞の場合、文脈によって付加詞と解釈できるものは、*it* 分裂文の焦点となることができる、ということを見てきた。

ある要素が分裂文の焦点として生起することができるには、一定の意味的・語用論的条件を満たしている必要があることは論を待たない。既に 1 節で概観したように、中右(1994:156)によれば、分裂文の焦点は命題内容成分であること、という意味論的制約に集約することができる。ここで、命題領域からモダリティ領

域への認知転換に関わる中右(1994)の議論を見てみよう。

頻度副詞は、本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である。しかし、頻度副詞がモダリティ成文として it 分裂文の焦点位置に生じている例がある：

(36) a. It is *always* oneself that one encounters in traveling.

b. It is *often* your children that howl during the night. (中右, 1994: 159)

(36)では、*always*、及び *often* は命題内容成分ではなく、モダリティ成分として機能している。これについて、中右(1994: 159)は、「理論的には、命題領域からモダリティ領域への認知転換が起こっているとみたい」と述べている。it 分裂文は文の焦点が主節に固定している有標の構文であり、中右(1994)にしたがえば、その焦点位置に生じることができるのは、命題内容成分だけである。このことから、次のことが導かれる：

(37) a. ある要素が文の焦点であることは、その要素が命題内容成分であることの十分条件である。

b. ある要素が命題内容成分であることは、その要素が文の焦点となることができることの必要条件である。

c. したがって、ある要素が文の焦点であれば、それは命題内容成分であることと同値である。

中右(1994: 159)は、Greenbaum (1969)から次の例を引用し、*only* によって焦点化される要素は「文の焦点」になることができる、と論じている：

(38) a. *Only occasionally* did he reply politely.

b. **Only usually* did he reply politely. (ibid.)

(38a)の *occasionally* は、*only* によって焦点化されている。したがって、*occasionally* は文の焦点になることができ、命題内容成分であるといえる。一方、*usually* は、*only* によって焦点化することはできない。よって、*usually* は命題内容成分ということとはできない。このことから、中右(1994)は、本来的には命題内容成分である頻度副詞が、認知転換が生じたため、(36)では、モダリティ成分として機能している、と結論づけている。

5.2 モダリティ領域から命題領域への認知転換

中右(1994)で問題となるのは、分裂文の焦点に次のような付加詞が単独で生起

している例である：

(39) It was *casually* that Leslie greeted the stranger. (Quirk et al., 1985: 574)

casually は、中右(1994)によれば D モダリティであり、単独では it 分裂文の焦点部に生じることとはできないはずである。ここで、前節の認知転換の議論を(39)の *casually* にあてはめて考えてみると、*casually* は、本来、モダリティ領域に属するが、(39)では命題領域へ認知転換されている、と想定することができる。このことを次の例で確かめてみよう：

(40) Only *casually* did Leslie greet the stranger.

(40)が適格文であることから、*casually* は焦点化下接詞(focusing subjunct) *only* によって焦点化されていることが分かる。したがって、(40)では、*casually* はモダリティ領域から命題領域へ認知転換され、命題内容成分となっているといえる。このことから、(39)では、*casually* が命題内容成分となっており、it 分裂文の焦点位置に単独で生じることが可能となる理由が導かれる。

(40)をよく見ると、認知転換の引き金となっているのは、焦点化下接詞である *only* であることが分かる。さらに、*only* は、どのような付加詞、あるいは下接詞でも焦点化できるかどうか、ということを確認するために、Greenbaum(1969: 21)の「基準 6」にしたがい、文頭の *only* が後続の付加詞、あるいは下接詞を焦点化し、同時に主語-動詞倒置が許されるか、ネイティブチェックを行った。結果は次の通りである：

(41) Criteria 6: To satisfy this criterion, the item must be able to be focused by *only* in initial position and allow in consequence Verb-Subject inversion.

Greenbaum (1969: 21)

(42) Only *occasionally* did they invite John to their house for a party.

(43) ??Only *usually* did Dr. Smith see his patients in the evenings.

(44) *Only *categorically* did he deny her accusation.

(45) Only *casually* did John greet the visitor.

(46) Only *visually* did this performance art appeal to the public.

(47) *Only *generally* did John leave home at six in the morning.

(48) *Only *probably* was John not able to concentrate on his work.

(49) *Only *certainly* will he give in in a few days.

(50) ?Only *fairly* did the engine spring to life.

(51) Only in the Japanese style did they cook chicken.

これらの例から、only によって焦点化できる副詞と、それができない副詞が存在することが分かる。only によって焦点化できるのは、下接詞の *casually* と *visually*, *fairly*, 手段・道具の付加詞である *in the Japanese style* である。only によって焦点化できないのは、様態付加詞である *categorically*, および *generally*, *probably*, *certainly* などの付加詞である。興味深いのは、*occasionally* も *usually* もともに頻度付加詞であるが、only によって焦点化できるのは *occasionally* だけである。

焦点化下接詞は制限下接詞 (*restrictive subjunct*) と追加的下接詞 (*additive subjunctive*) に下位分類される。制限下接詞については、“Restrictive subjuncts indicate that the utterance concerned is true in respect of the part focused. (Quirk et al.1985: 604)”, とあり、「焦点化された部分について、当該の発話は真である、ということを示しているのが制限下接詞である」と指摘されている。このことを命題とモダリティの枠組みでとらえ直してみると、次のように言うことができる：

(52) 制限下接詞によって焦点化することができる付加詞，あるいは下接詞は，当該の発話においてその真偽を問うことができる，すなわち命題内容成分として認知される。

さらに、(52)の論理的帰結として、次のように述べることができる：

(53) 制限下接詞 only によって焦点化することができる付加詞，あるいは下接詞は，発話内でモダリティ成分（モダリティ領域）から命題内容成分（命題領域）への認知転換が可能である。

6. 総記的含意と認知転換

6.1 it 分裂文の総記的含意

これまで議論してきたことは、付加詞，あるいは下接詞は、it 分裂文の焦点に単独で生じることができるものもあれば、それができないものもある，ということであった：

(54) It was *casually* that Leslie greeted the stranger. (Quirk et al., 1985: 574)

(55) It was *intonationally* that these linguistic units were separated. (ibid: 562)

(56) It was *surgically* that he treated the patient. (ibid.)

(57) *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck. (ibid: 561)

(58) *It was *usually* that John replied politely.

(Greenbaum, 1969: 21)

(54)-(56)の *it* 分裂文では、制限下接詞 *only* が現れていないにもかかわらず、付加詞、及び下接詞が単独で焦点位置に生起している。中右(1994)の枠組みでいえば、*only* によって限定されていないにもかかわらず、*casually*, *intonationally*, *surgically* などのモダリティ成分が命題内容成分に認知転換されている、と考えることができる。これらの分裂文では、何らかの要因によって認知転換が引き起こされていると思われる。それでは、(54)-(56)において、制限下接詞 *only* と同等の機能を果たしているのはどのような要因であろうか。結論を先に言えば、その答えは、*it* 分裂文の構文に由来する語用論的機能、すなわち「総記的含意 (exhaustiveness implicature)」に求めることができる。

it 分裂文はその焦点に置かれた要素を際立たせるという機能の他に、それ以外の要素を排除するという総記的含意を持つことが知られている (Halliday, 1967, Declerck, 1988, Collins, 1991, 加藤, 1998 他) :

(59) a. The car needs a new battery, amongst other things.

b. *The car only needs a new battery, amongst other things.

c. ?It is a new battery that the car needs, amongst other things.

(Collins, 1991: 32-33)

(59b)が不適格であるのは、*only* と *amongst other things* の意味が論理的に矛盾しているからである。すなわち、一方で、*only* の使用によって新しいバッテリー以外のものを明示的に排除しておきながら、他方で、複数のものの集合から選択することを許す *amongst other things* を用いているため、論理的矛盾が生じるのである。(59c)の分裂文では、*only* のような総記性を明示する要素が現れていないにも関わらず、適格性が低くなっている。これは、分裂文が総記的含意を持ち、これが *amongst other things* によって表される意味と相容れないからと考えることができる。これらのことから、*it* 分裂文の総記的含意が制限下接詞 *only* と同様の機能を果たしていることは明らかである。

6.2 付加詞、下接詞の認知転換と総記的含意

これまでの議論から、(53)と「焦点化されうる要素は、命題内容成分である」という中右(1994: 156)の主張、さらに *it* 分裂文の「総記的含意」、及び Greenbaum(1969)の「基準 6」から、次のような論理的帰結を導くことができる：

(60) 主語-動詞倒置構文において、文頭の制限下接詞 *only* によって焦点化することができる付加詞、あるいは下接詞は、*it* 分裂文の焦点として単独で生起することができる。²

(42)-(51)から明らかなように、主語-動詞倒置構文において、文頭の制限下接詞 *only* によって焦点化することができるのは、*casually*, *visually*, *fairly* などの下接詞、及び頻度付加詞の *occasionally*, 手段・道具の付加詞である *in the Japanese style* などである。また、*only* によって焦点化することができないのは、様態付加詞である *categorically*, および *generally*, *probably*, *certainly*, *usually* などの付加詞である。(60)の妥当性を確かめるために、これらの付加詞、下接詞が *it* 分裂文の焦点として単独で生起できるか、ネイティブチェックを行った：

- (61) It was *casually* that John greeted the visitor.
- (62) It was *visually* that this performance art appealed to the public.
- (63) ?It was *fairly* that the engine sprang to life.
- (64) ?It was *occasionally* that they invited John to their house for a party.
- (65) It was *in the Japanese style* that they cooked chicken.
- (66) *It was *usually* that Dr. Smith saw his patients in the evenings.
- (67) *It was *categorically* that he denied her accusation.
- (68) *It was *generally* that John left home at six in the morning.
- (69) *It was *probably* that John was not able to concentrate on his work.
- (70) *It is *certainly* that he will give in in a few days.
- (71) *It was *completely* that he ignored their request.

主語-動詞倒置構文において、文頭の制限下接詞 *only* によって焦点化することができない *usually*, *categorically*, *generally*, *probably*, *certainly* などの付加詞、及び下接詞の *completely* は、(66)-(71)が示すように、*it* 分裂文の焦点に単独で生じることとはできないことが分かる。また、(61)-(65)が適格文であることから、文頭の制限下接詞 *only* によって焦点化することができる *casually*, *visually*, *fairly*, *occasionally*, *in the Japanese style* などは、*it* 分裂文の焦点に単独で生じることができることが確認できる。

(61)-(65)の例をよく見てみると、(63)の *fairly*, (64)の *occasionally* の容認性が他の例より低くなっていることが分かる。これは、元来、モダリティ成分であるこれらの付加詞にとって、*it* 分裂文の総記的含意だけでは制限効果が十分ではないことによると思われる。すなわち、モダリティ領域から命題領域への認知転換が、命題内容成分として真偽を問えるほど十分に行われていないことによると考えら

れる。このことは、これらの付加詞に制限下接詞 *only* を付け加えてみると、容認性が向上し、適格文になることによって確認できる：

(72) It was *only fairly* that the engine sprang to life.

(73) It was *only occasionally* that they invited John to their house for a party.

上記の議論から、(60) は付加詞、あるいは下接詞が *it* 分裂文の焦点位置に単独で生起できる可能性について、正しく予測できることが明らかになった。この意味で(60) は理論的に妥当な主張であるといえることができる。

まとめ

本稿では、副詞相当語句のうち、付加詞と下接詞を取り上げ、どのような条件の下に *it* 分裂文の焦点として単独で生起できるか、意味論、とくに中右(1994)の階層意味論の立場、及び認知語用論の立場から考察を行った。この際、元来、モダリティ成分である付加詞、及び下接詞は、制限下接詞 *only*、及び *it* 分裂文に伴う総記的含意によって、命題内容成分へと認知転換され、*it* 分裂文の焦点として単独で生起できることを論じた。

*本研究は、日本学術振興会平成 19 年～20 年度科学研究費補助基盤研究(C)課題番号 No.19520417 の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿は、紙数制限により、論文全体の整合性を保つため、加藤(印刷中)と重複する部分を含んでいることをあらかじめ断っておく。また、Carolyn Kaltenback 氏、及び Ivan Brown 氏には、例文の容認性判断でお世話になった。

注

1. 付加詞、あるいは下接詞は、単独では *it* 分裂文の焦点に生起できないが、他の要素に修飾される場合や疑問や否定の対象となる場合は、容認性が改善される(3.2 参照)：

(i) a. *It was *completely* that he ignored your request.

b. ?Was it *completely* that he ignored your request? (Quirk et al., 1985:597)

(ii) a. *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck. (ibid: 561)

b. ?Was it *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck? (ibid: 562)

(iii)a. *It was *usually* that she saw her patients in the mornings. (ibid: 546)

It was *usually* in the morning that she saw her patients. (ibid.)

2. *categorically, generally, probably, certainly, usually*などの付加詞が it 分裂文の焦点に単独で生じることができないことは、これらの付加詞の意味素性が it 分裂文の総記的含意と相容れない、と考えることもできると思われる。また、Declerck (1988)は「it 分裂文は that 節の変項 X を焦点の値 Y で指定する文である。」と主張し、Huddleston and Pullum (2002)は「it 分裂文の焦点は、that 節のギャップ (gap) を埋める機能を持つ。」などと述べている。これらの考え方をとると、

(i) *It was *generally* that John left home at six in the morning.

(ii) *It was *probably* that John was not able to concentrate on his work.

(iii) *It is *certainly* that he will give in in a few days.

などの例では、that 節の変項 X を指定する値 Y として、それぞれ *generally, probably, certainly* を当てることは、意味論的、語用論的にずれが生じ、結果として適切ではないと考えられる。これによって、(i)-(iii)が不適格な文となっているのである。

したがって、(60)は、it 分裂文の総記的含意を用いて規定することもできると思われる。しかし、総記的含意は「言語規約的含意 (conventional implicature)」というよりはむしろ「会話の含意 (conversational implicature)」である、という議論があり (加藤, 2002), 「会話の含意」を制約に盛り込むことについては、理論的整合性の問題も残る。これについては、稿を改めて論じることにする。

参考文献

- Collins, P. C. (1991) *Clefts and Pseudo-Clefts Constructions in English*, London: Routledge.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Cleft*, Leuven: Leuven University Press.
- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.
- Halliday, M.A.K (1967) "Notes on transitivity and theme in English," *Journal of Linguistic* 3:177-274.
- Huddleston, R. and G. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 加藤雅啓 (1998) 「分裂文と wh 分裂文の排他性含意」 *International Journal of Pragmatics* 8:33-48. Pragmatic Association of Japan.
- 加藤雅啓 (2002) 「分裂文と疑似分裂文の総記的含意」『英語青年』2002年7月号, pp. 236-237, 研究社出版
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』東京：大修館書店。

岡田伸夫(1985) 『副詞と挿入文』 東京：大修館書店.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, London: Longman.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of The English Language*, London: Longman.

第 2 章

It 分裂文の焦点に生じる付加詞と下接詞

加藤雅啓*

要旨

英語には、統語構造上、文の焦点が特定の位置に生じる構文がある。it 分裂文は、学校文法でも it-that の強調構文として知られているように、主節(it 節)と従属節(that 節)の複文構造から成り、焦点が主節の be 動詞の後の位置に固定した構文である。この焦点位置に生起できるのは、典型的には名詞句と前置詞句であるとされているが、これら以外の文法項目も焦点として生じることができることが知られている。本稿は、このうち Quirk et al. (1985) における付加詞、及び下接詞をとりあげ、その焦点位置での生起可能性について、中右(1994)のモダリティ理論の枠組みによって一般化を試みるものである。

KEY WORDS

adjunct	付加詞	focus	焦点
it-cleft	it 分裂文	modality	モダリティ
subjunct	下接詞		

0. はじめに

英語の it 分裂文については、統語論はもちろん、意味論・語用論においても数多くの論考がある。しかしながら、it 分裂文の焦点位置に生じることのできる要素として、典型的には名詞句や前置詞句等があるが、これ以外の要素については十分に明らかにされているとは言い難いのが現状である。

Quirk et al. (1985: 504)は“...and unlike other adverbials, an adjunct can be the focus of a cleft sentence:”と述べ、他の副詞相当語句(adverbial)と異なり、付加詞(adjunct)は it 分裂文の焦点になることができると指摘している：

- | | |
|---|--------------------------|
| (1) It was <i>because of his injury</i> that Hilda helped Tony. | (Quirk et al. 1985: 504) |
| (2) It's <i>rarely/seldom</i> that he loses any money. | (ibid.: 548) |
| (3) *It was <i>fairly</i> that he sprang at her. | (ibid.: 567) |
| (4) *It was <i>completely</i> that he ignored your request. | (ibid.: 597) |

(1)の *because of*, (2)の *rarely/seldom* は付加詞であるので it 分裂文の焦点に生起できるが、(3)の *fairly*, (4)の *completely* は下接詞(subjunct)であるため、it 分裂文の焦点として生じることはいできない。

ところが付加詞であっても it 分裂文の焦点に単独では生起することができない例がある：

- | | |
|--|--------------|
| (5) *It is <i>generally</i> that the theory is accepted. | |
| (6) *It was <i>usually</i> that she saw her patients in the mornings. | (ibid.: 546) |
| (7) *It was <i>categorically</i> that they were told that no more oil would come from the wreck. | (ibid.: 561) |

(5)-(7)の *generally*, *usually*, *categorically* は、いずれも Quirk et al. (1985)では付加詞として分類されているが、単独では it 分裂文の焦点位置に生起することはできない。

Quirk et al. (1985)は、(5)-(7)のように付加詞でありながら、it 分裂文の焦点位置に生じることができない例について、何らかの原理に基づいた説明を行っているわけではなく、言語事実の記述にとどまっている。本稿では、

副詞相当語句(adverbial)のうち、付加詞と下接詞をとりあげ、どのような場合に it 分裂文の焦点として生起できるのか、意味論、とくに中右(1994)の階層意味論の立場から考察を進めることにする。

1. 付加詞の焦点化

1.1 付加詞の統語的特徴

Quirk et al. (1985: 504) によれば、付加詞(A)は他の副詞相当語句とは異なり、主語(S)、目的語(O)、補語(C)などと極めて類似した統語的振る舞いを見せる¹：

- (8) a. Hilda helped Tony because of his injury.
b. It was *Hilda* that helped Tony because of his injury. [S]
c. It was *Tony* that Hilda helped because of his injury. [O]
d. It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. [A]

(8b)と(8c)は、それぞれ(8a)の主語(*Hilda*)、及び目的語(*Tony*)が it 分裂文の焦点となっている。(8d)は、付加詞である *because of his injury* も it 分裂文の焦点として生起することができることを示している。

次の例では、付加詞である *because of his injury* は、主語、目的語同様、選択疑問文における選択の対照、あるいは否定文における対照的焦点となることができることが分かる：

- (9) a. Did *Hilda* help Tony or did *Bill* help him? [S]
b. *Hilda* didn't help Tony but she helped Wendy. [O]
c. Did *Hilda* help Tony *because of his injury* or (did she help him) to please her mother? [A]
d. *Hilda* didn't help Tony *because of his injury* or (did she help him) to please her mother. [A]

また、付加詞は、主語、目的語同様、焦点下接詞 *only* の焦点となることができる：

- (10) a. Only *Hilda* helped Tony... [S]
b. *Hilda* only helped Tony. [=Hilda helped only Tony...] [O]
c. *Hilda* only helped Tony *because of his injury*. [=Hilda helped Tony only because of his injury.] [A]

さらに、次の例では、付加詞は主語、目的語、及び補語同様、省略や代用表現のスコープ内に入っていることが分かる：

- (11) a. In 1981 [A], Grace became a teacher [C] and so did Harnish.
= Grace became a teacher [C] in 1981 [A] and Harnish became a teacher [C] in 1981 [A].
b. Fred carefully [A] cleaned his teeth [O] but Jonathan didn't/not.
= Fred carefully [A] cleaned his teeth [O] but Jonathan didn't carefully [A] cleaned his teeth. [O]

最後に、付加詞は主語、目的語、及び補語と同様に、疑問の対象とすることができる：

- (12) a. Who became a teacher? (Grace [S])
b. What did Grace become? (A teacher [C])
c. Who(m) did Hilda help? (Tony [O])
d. Why did Hilda help Tony? (Because of his injury [A])

このように、付加詞は他の文法範疇とよく似た統語的振る舞いを見せることが分かる。ここでとくに注目したい

のが、(8d)で見たような it 分裂文の焦点位置における付加詞の生起可能性である。

1. 2 頻度付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 547)は、“Most frequency adjunct can be the focus of a cleft sentence, particularly if they are modified or are in a negative or interrogative focal clause.”と述べ、頻度の付加詞の多く、とくに他の要素によって修飾される、あるいは否定や疑問の焦点（節）である場合は、分裂文の焦点になることができると指摘している：

- (13) a. (?) It's *very frequently* that he loses money.
b. It's *not often* that have a chance to speak to him.
c. Is it *often* that she drives alone?
- (14) a. It's *all too frequently* that people don't offer to help.
b. Is it *very often* that she doesn't speak to him?
c. It isn't *very often* that she doesn't speak to him.

(13a)は、頻度の付加詞 *frequently* が他の副詞 *very* に修飾され、it 分裂文の焦点となっている例である。(13b), (13c)は、いずれも頻度付加詞 *often* が否定、あるいは疑問の対象となり、it 分裂文の焦点となっている例である。(14)の例も同様である。

1. 3 様態の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 561)は、“Normally, when manner adjuncts are realized by adverbs, they cannot be the focus of a cleft sentence, but their acceptability is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative.”と述べ、副詞として具現化された様態の付加詞は、単独では分裂文の焦点にはなれないが、他の要素によって修飾される、あるいは疑問、否定の焦点となる場合は、容認性が向上すると指摘している：

- (15) a. *It was *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck.
b. ?Was it *categorically* that they were told that no more oil would come from the wreck?
- (16) a. ?It's *in the French style* that they cook.
b. It isn't *in the French style* that they cook.
- (17) a. ??It was *violently/loudly* that they argued.
b. (?)It was *so very violently/loudly* that they argued.
- (18) It was *with the utmost care/precision/caution* that the last girder was laid in place.

(15a)は、様態の付加詞 *categorically* が単独で it 分裂文の焦点に用いられている例であるが、不適格となっている。しかし、(15b)では、焦点として *categorically* が用いられているが、it 分裂文が疑問化されているため、容認性が向上している。(16)も同様である。(17b)では、修飾要素 *so very* が付加されることによって容認性が改善することが見て取れる。(18)は、*the utmost* によって様態の付加詞 *care/precision/caution* が修飾されているため、適格文となっている。

1. 4 手段・道具・動作主の付加詞と it 分裂文

Quirk et al. (1985: 562)は、“...means, instrument, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, even as realized by single adverbs (though less idiomatically in these circumstances)...”と述べ、手段・道具・動作主の付加詞は単独で用いられた場合でも、it 分裂文の焦点になることができると指摘している。

- (19) a. It was *with a bullet* that he was killed.
b. It was *by a terrorist* that he was killed.

c. It was *intonationally* that these linguistic units were separated.

(19a)は手段の付加詞, (19b)は動作主の付加詞が, (19c)は手段を表す付加詞が, 単独で it 分裂文の焦点として用いられている例である。

本節では, 頻度付加詞, 及び手段・道具・動作主の付加詞は, 単独で it 分裂文の焦点になることができ, 様態の付加詞は, 他の要素によって修飾される, あるいは疑問、否定の焦点となる場合は it 分裂文の焦点になることができる, ということを見てきた。

2. 下接詞の焦点化

2. 1 下接詞の統語的特徴

Quirk et al. (1985: 566)は, “they (=subjuncts) cannot usually be treated grammatically in any of the four ways stated in 8.25 as being applicable to adjuncts.”と述べ, 下接詞は, 付加詞が持つ主語、目的語、補語と同様な統語的特徴(1. 1 参照)を持たないと指摘している:

- (20) a. *It was *fairly* that he sprang at her...
b. *Did he spring at her *fairly* or...?
c. *He only *fairly* sprang at her...
d. *[How did he spring at her...?] **Fairly*.

下接詞である *fairly* は, (20a-d)に見るように, it 分裂文の焦点として生起することができず, 選択疑問文の選択の対象となることもできず, また, 焦点下接詞 *only* の焦点となることもできず, さらに, 疑問の対象となることもできない。次の例に見るように, 下接詞に分類される増幅詞(amplifier)の *completely* も it 分裂文の焦点として生起することはできない:

- (21) *It was *completely* that he ignored your request.

(Quirk et al. ,1985: 597)

2. 2 下接詞から付加詞への転換

Quirk et al. (1985: 573-574)によれば, すべての下接詞が it 分裂文の焦点として生起することができないというわけではなく, 主語指向(subject-oriented)の下接詞は, 付加詞として解釈することができ, it 分裂文の焦点に生起できるものがある, と指摘している:

- (22) a. Leslie greeted the stranger *casually*. ['in a casual offhand manner', his greeting was casual]
b. *Casually*, Leslie greeted the stranger. ['Leslie was casual, offhand, when he greeted the stranger']
(23) It was *casually* that Leslie greeted the stranger.

(22a)では, *casually* は付加詞として解釈されると, 「気楽に, 何気ない方法で」という様態の意味を伝え, (22b)では, 下接詞として主語である Leslie の属性に言及し, 「ぶっきらぼうに, ぞんざいに」という意味になる。(23)は, *casually* が付加詞として解釈されるため, it 分裂文の焦点として生起できることを示している例である。

以上, Quirk et al. (1985)にしたがい, 第1節では, 頻度付加詞, 及び手段・道具・動作主の付加詞は, 単独で it 分裂文の焦点になることができるが, 様態の付加詞は, 他の要素によって修飾される, あるいは疑問、否定の焦点となる場合は it 分裂文の焦点になることができることを確認した。第2節では, 下接詞は, 原則的には it 分裂文の焦点になることはできず, 主語指向の下接詞の場合, 文脈によって付加詞と解釈できるものは it 分裂文の焦点になることができる, ということを見てきた。

3. Quirk et al. (1985)における言語事象の記述

Quirk et al. (1985 : 504, 1071)は, *because* 句(節)は付加詞として機能するため, *it* 分裂文の焦点に生じることができると主張している :

- (24) a. It was *because of his injury* that Hilda helped Tony. (=8d) (Quirk et al. ,1985 : 504)
b. It's *because they are always helpful* that he likes them. (ibid.: 1071)

一方, *since* 節は離接詞(disjunct)であるため *it* 分裂文の焦点とは成り得ない, と次の例を挙げている :

- (25) a. *It is *since she ran out of money* that she had to defer buying a new car. (ibid.: 613)
b. *It's *since they are always helpful* that he likes them. (ibid.: 1071)

ところが, 言語事象をさらに詳細に見てみると, *because* 句(節)が付加詞として機能していながら, *it* 分裂文の焦点として生じることができる場合とできない場合があることが分かる :

- (27) a. He is not coming to class *because he's sick*.
b. It's *because he's sick* that he's not coming to class. (中右,1994: 162)
(28) a. He is not coming to class, *because his wife told me*.
b. *It's *because his wife told me* that he's not coming to class. (ibid.)
(29) a. The prime minister is expected to step down, *because newspapers have reported the possibility of his resignation*.
b. *It's *because newspapers have reported the possibility of his resignation* that the prime minister is expected to step down.

(27b), (28b), (29b)の *because* 節は, いずれも付加詞であるが, (27b)では *because* 節が *it* 分裂文の焦点として生起できるのに対し, (28b), (29b)の *because* 節はそれが不可能である。

これらの例を見てみると, ある副詞句(節)が付加詞であることは, その副詞句(節)が *it* 分裂文の焦点として生起できることに對する十分条件とは成り得ないことが分かる。

さらに, 次の例に見るように, 時を表す下接詞は *it* 分裂文の焦点として生じることができる :

- (30) a. It was *only just now* that I remembered our appointment.
b. ?It is *only a little* that we play bridge. (Quirk et al., 1985: 582)

したがって, ある副詞句(節)が *it* 分裂文の焦点として生起できることは, その副詞句(節)が付加詞であることの必要条件でもないことが明らかである。

(27)-(29), 及び(30)に関わる分析から, 副詞相当語句が *it* 分裂文の焦点として生起できるか否かということに限って見てみると, 付加詞, あるいは下接詞などの統語的分類は, 言語事象を正しく反映しているとは言い難い側面があり, この意味で記述的妥当性について問題が残されていると思われる。

4. 階層意味論とモダリティ表現

4. 1 中右(1994)

中右(1994)は, 文の意味の基本骨格はモダリティと命題内容からなる階層構造をなしているとする階層意味論を展開している。モダリティは, ①話し手, ②発話時点, ③心的態度という3つの要素から成り立っており, 概略, 「発話時点における話し手の心的態度」ということばでまとめることができる主観的意味成分のことである(中右,1994:42)。モダリティは, さらに「命題態度」を表すSモダリティと「発話態度」を表すDモダリティの2つのタイプに分けられる。命題態度とは, 「命題内容の真理値(真か偽の値)」について話し手が下す査定判断のことで

あるのに対し、発話態度とは、一定の談話コンテキストのものと話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識(意図、姿勢)のことである(中右,1994: 41)」、と述べられている。命題態度は独立節としての文に内在的な義務的意味成分であるのに対し、発話態度は非義務的意味成分であり、いずれのタイプも命題の真偽値に関して影響を及ぼさないと規定されている。中右(1994)で展開されているモダリティに関する議論をまとめると次の表1になる：

表 1

モダリティ	
S モダリティ	D モダリティ
・定義: 話し手が発話時点において全体命題 PROP ⁴ (の真偽いずれかの値) に対してとる信任態度 (コミットメント) のこと	・発話主体の態度表明、つまり発話・伝達態度のこと
・命題態度 (命題内容の真理値について、話し手が下す査定判断・信任態度) を表す	・発話態度 (談話コンテキストのもとに、話し手がみずからの発話行為についていただく何らかの意識 (意図・姿勢)) を表す
・命題内容を限定する	・談話要因をもとに発話の在り方、伝達様式を限定する
・独立節としての文に内在的な義務的意味成分	・独立節としての文に外在的な随意的意味成分
・全体命題 PROP ⁴ を作用域とする	・構文全体、つまり S モダリティ+全体命題 PROP ⁴ を作用域とする
・当該の言語表現を省くと同じ命題態度が保持されない	・当該の言語表現を省いても同じ命題態度が保持される

4. 2 It 分裂文とモダリティ表現

中右(1994)は、焦点位置が固定している有標構文として it 分裂文を取り上げ、階層意味論の観点から次のように述べている：

- (31) a. it 分裂文は統語論的には複文構造を形作っているにもかかわらず、意味論的には全体で一つの独立節に相当する意味構造を備えている。
b. it 分裂文の全体命題 PROP⁴ の成分は、主節の焦点部分と従節の前提部分とに二分されている。
c. it 分裂文の主観的モダリティ成分は、前景の主節にのみ生じる。
d. それゆえ、主節の命題成分こそが文の焦点である。 (中右, 1994: 139)
- (32) S モダリティは、それが作用域とする全体命題 PROP⁴ 内の要素を焦点部位とする。ただし、その要素は語彙論的、統語論的、韻律論的、語用論的条件を同時に満たしていなければならない。 (ibid.:151-152)

(31)及び(32)を要約すると、①焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、S モダリティではないこと、②S モダリティはむしろ、焦点化を引き起こす要素、つまり焦点因子であること、それゆえ、③焦点化される命題内容成分はモダリティの焦点を形作ること、ということが出来る。これらのことをふまえたうえで、it 分裂文でモダリティ表現が焦点化されるか否かについて、次の例を挙げて論じている：

- (33) a. In all probability, John disagrees with you.
b. *It is in all probability that John disagrees with you.
c. In all probability, it is John that disagrees with you. (ibid.:155)

(33)の各文において、全体命題を形作るのは、*John disagrees with you* の部分であるのに対し、*in all probability* の部分は S モダリティを形作っている。ここで、(33b)が不適格なのは、まさしくモダリティ表現が焦点化されているからである。その一方、(33c)が適格文であるのは、命題内容成分である *John* が焦点化されているからにほかならない。以下、中右(1994)で論じられている、it 分裂文の焦点位置に生起する副詞を巡る議論を概観することにする。

4. 3 時間副詞と it 分裂文

中右(1994)は、時間副詞が it 分裂文の焦点として生起できるか否か、ということに関して、統語的な制約ではこれを正しくとらえることができず、当該の時間副詞が命題内容成分であるか、あるいはモダリティ成分であるか、という意味論的観点によって初めてとらえることができる、と主張している：

(34) a. *It was *yesterday* John who replied politely.

b. It was *usually* John who replied politely.

(35) a. It was *yesterday* that John replied politely.

b. *It was *usually* that John replied politely.

(ibid.: 158)

(34a)と(34b)、及び(35a)と(35b)は、統語的には全く同じ構造であるにもかかわらず、その適格性に相違があるが、これを統語論的制約でとらえることは困難である。これについて、中右(1994: 158)は、「焦点位置に生起可能かどうかの違いから、*yesterday* は命題内容成分なのに対し、*usually* はモダリティ成分であることがはっきりする。」と述べている。すなわち、it 分裂文の主節の焦点になることができるのは、一つの命題内容成分だけである、ということができる。

4. 4 頻度副詞と it 分裂文

中右(1994: 159)は、*always*, *often*, *occasionally* などのように頻度を表す副詞を頻度副詞と呼び、*usually* などの他の副詞と区別している。さらに、次の例をあげ、「頻度副詞は本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である」、と分析している：

(36) a. **Only usually* did he reply politely.

b. *Only occasionally* did he reply politely.

(37) He *did not always* reply politely, but he *did* reply politely *sometimes*.

(ibid.: 158)

(36)から、*occasionally* は *Only* によって焦点化できるが、*usually* はそれができないことが分かる。さらに、(37)では、*always* と *sometimes* が対照の焦点となっていることが明らかである。これらのことから、頻度副詞は命題内容成分として機能している、と指摘されている。

この主張は、すでに 1. 2 節でみてきた Quirk et al. (1985: 547)の例文によってさらに確認することができる(以下に再掲)：

(38) a. (?) It's *very frequently* that he loses money.

b. It's *not often* that have a chance to speak to him.

c. Is it *often* that she drives alone?

(39) a. It's *all too frequently* that people don't offer to help.

b. Is it *very often* that she doesn't speak to him?

c. It isn't *very often* that she doesn't speak to him.

いずれの例も、頻度の付加詞が it 分裂文の焦点となっている例である。

4. 5 強意副詞と it 分裂文

中右(1994: 160)は、*only, particularly, also, purely, chiefly, simply* などの副詞は、焦点要素を限定する働きがあることから、これらの副詞を強意副詞と呼んでいる。強意副詞は、it 分裂文に生じるときは、主節の焦点要素に付加的に隣接して生じるのが通例である、と述べている：

- (40) a. It was {*only/particularly/also*} John who protested.
b. It was *purely out of spite* that he assigned it that number.
c. It is *chiefly in this sense* that Berkeley denies matter.

(中右, 1994: 160)

中右(1994: 160)によれば、これらの強意副詞は主節内に生じ、話し手の主観そのものを反映しているため、D モダリティに分類される。したがって、(31)及び(32)から、これらの副詞は単独で it 分裂文の焦点に生じることはできないと予測される：

- (41) a. *It was {*only/particularly/also*} that John protested
b. *It was *purely* that he assigned it that number.
c. *It is *chiefly* that Berkeley denies matter.

4. 6 時の副詞節と it 分裂文

中右(1994: 161)は、時を表す接続詞は内在的に命題内容成分としての性質を備えているので、それが導く時の副詞節は it 分裂文の焦点としてに生じることができる、と次の例をあげて主張している：

- (42) a. It is *when we forget about the cultural side of our behavior* that we are most likely to be surprised or confused by the other person's behavior.
b. It's *since he began the research on his dissertation* that Bill has gone nuts.
c. It was *not until I got home* that I realized that I had lost my keys.

(中右, 1994: 161)

いずれの例でも、時を表す副詞節が節全体として命題内容成分としての性質を有していると考えられる。

4. 7 理由の because と it 分裂文

中右(1994: 162)は、理由を表す *because* を巡って、極めて興味深い議論を展開している。*because* は潜在的にありまいで、命題内容成分として客観的因果関係を表す場合と、D モダリティとして主観的推論関係を表す場合があるという：

- (43) a. He is not coming to class *because he's sick*.
b. It's *because he's sick* that he's not coming to class.
(44) a. He is not coming to class, *because his wife told me*.
b. *It's *because his wife told me* that he's not coming to class.

(中右, 1994: 162)

(43)は「彼は病気なのでクラスに来ないよ」といっているのに対し、(44)は「彼はクラスに来ないよ、だって奥さんがそうっていたよ」と解釈できる。(43)の *because* 節は、病気が原因でクラスを欠席するという因果関係を述べており、これは定義上、命題領域に帰属する客観的関係を表していることから、命題内容成分である。一方、(44)の *because* 節は、モダリティ領域に帰属する主観的な推論関係を述べており、主観的推論関係を表す D モダリティ表現である。(43b)と(44b)の容認性の違いは、命題内容成分のみ焦点化できる、という(31)、及び(32)の一般

化が妥当であることを示している、と中右(1994)は論じている。

5. 命題領域とモダリティ領域の認知転換

中右(1994: 139, 151)は、(31), 及び(32)で明らかにしたように、焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない、と主張している。このことを it 分裂文にあてはめると、it 分裂文の焦点位置には、モダリティ表現は単独で生起することはない、ということが論理的帰結として得られる。しかしながら、it 分裂文をよく見てみると、モダリティ表現が単独で焦点位置に生じている例がある：

(45) It was *casually* that Leslie greeted the stranger.

(Quirk et al., 1985: 574)

中右(1994)にしたがえば、*casually* は、定義上、D モダリティであり、単独では it 分裂文の焦点位置に生じることにはできないはずである。この例をもって(31), 及び(32)で提示した「焦点化されうる要素、つまり焦点部位は、命題内容成分であって、モダリティではない」という一般化を廃棄するには早計である。

すでに 4. 4 節で概説したように、頻度副詞は、本来、テンス領域に帰属する命題内容成分である。しかし、頻度副詞がモダリティ成分として it 分裂文の焦点位置に生じている例がある：

(46) a. It is *always* oneself that one encounters in traveling.

b. It is *often* your children that howl during the night.

(中右, 1994: 159)

(46)では、*always*, 及び *often* は命題内容成分ではなく、モダリティ成分として機能している。これについて、中右(1994: 159)は、「理論的には、命題領域からモダリティ領域への認知転換が起こっているとみたい」と示唆している。it 分裂文は文の焦点が主節に固定している有標の構文であり、中右(1994)にしたがえば、その焦点として生じることができるのは、命題内容成分だけである。このことから、ある要素が文の焦点であれば、それは命題内容成分である、ということになる。中右(1994: 159)は、Greenbaum (1969)から次の例を引用し、*only* によって焦点化される要素は「文の焦点」になることができる、と論じている：

(47) a. *Only occasionally* did he reply politely.

b. **Only usually* did he reply politely.

(ibid.)

(47a)の *occasionally* は、*only* によって焦点化されている。したがって、*occasionally* は文の焦点になることができ、命題内容成分であるといえる。一方、*usually* は、*only* によって焦点化することはできない。よって、*usually* は命題内容成分ということとはできない。このことから、中右(1994)は、本来的には命題内容成分である頻度副詞が、(46)では、モダリティ成分として機能している、と結論づけている。

この議論を(45)の *casually* にあてはめて考えてみると、*casually* は、本来、モダリティ領域に属するが、(45)では命題領域へ認知転換されている、と想定することができる。このことを次の例で確かめてみよう：

(48) *Only casually* did Leslie greet the stranger.

(48)が適格文であることから、*casually* は *only* によって焦点化されていることが分かる。したがって、(48)では、*casually* はモダリティ領域から命題領域へ認知転換され、命題内容成分となっているといえる。このことから、(45)では、*casually* が命題内容成分となっており、it 分裂文の焦点となることが可能となる理由が導かれる。²

6. まとめ

本稿では、(27)-(29), 及び(30)に関わる分析から、副詞相当語句が it 分裂文の焦点として生起できるか否かということに限って見てみると、Quirk et al. (1985)における付加詞、あるいは下接詞などの統語的分類は、言語事象を

正しく反映しているとは言い難い側面があることを指摘し(3節), 中右(1994)の階層意味論におけるモダリティ理論の枠組みによって, it 分裂文の焦点に生起する副詞相当語句の意味的特性について, 新たな提案を行った。この際, 中右(1994)のモダリティ理論で問題となる *casually* を巡る議論について, モダリティ領域から命題領域への認知転換の可能性を検討した。

*本研究は, 日本学術振興会平成19年~20年度科学研究費補助基盤研究(C)課題番号 No.19520417 の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿は, 紙数制限による論文全体の整合性を保つため, 加藤(印刷中)と重複する部分を含んでいることをあらかじめ断っておく。

注

1. 例文はいずれも Quirk et al. (1985)による。
2. 認知転換に伴う詳細な議論については, 加藤(印刷中)を参照されたい。

参 考 文 献

Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.

加藤雅啓(印刷中) 「It 分裂文の焦点とモダリティ表現*—命題領域とモダリティ領域の認知転換と総記的含意—」, *International Journal of Pragmatics* Vol. XVII, Pragmatic Association of Japan.

中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店, 東京。

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Adjuncts and Subjuncts in the Focus Position of *It*-cleft Sentences

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article is concerned with the adverbials in the focus position of a cleft sentence . The main points argued are: (i) why frequency adjuncts as well as means, instruments, and agent adjuncts can readily become the focus of a cleft sentence, and (ii) why acceptability of manner adjuncts, which cannot be the focus of a cleft sentence, is increased if they are modified or if the focal clause is interrogative or negative. We will investigate these issues in the framework of Nakau's (1994) theory of modality and cognitive shift, and elucidate the semantic properties of adverbials appearing in the focus of a cleft sentence.

*Division of Languages: Department of Foreign Languages

第3章

ガ分裂文の談話機能

加藤雅啓*

(平成 20 年 9 月 30 日受付；平成 20 年 11 月 12 日受理)

要旨

本稿は、日本語の分裂文のうち、ガ分裂文を巡る議論を概観し、天野(1995a, b)で提案されているガ分裂文の判定条件に不備があること、砂川(2005)で主張されているガ分裂文の分類の妥当性を検討した後、関連性理論の枠組みによってガ分裂文に関する新たな代案を提示するものである。

KEYWORDS

分裂文

ガ分裂文

前項焦点文

後項焦点文

0. 分裂文の定義

日本語の分裂文研究に関しては、三上(1953)以来、「指定」と「措定」という概念によって、両構文の意味、機能の違いを明らかにしようとする研究がなされてきた。しかし、初期の研究では、対象とする文が分裂文であるのか、それとも非分裂文であるのか、その基準、すなわち分裂文の定義については、必ずしも明確に述べられている訳ではない。例えば、渡部(1979: 405)は、「分裂文とは、次の例に示すように〔 〕s のは・・・だという構造を持った文のことをいう。」と述べ、次の例をあげている。

- (1) a. メアリーを愛しているのはジョンだ。
- b. 野島が杉子にはじめて会ったのはそのパーティーでだ。
- c. 僕が学校を休んだのはかぜをひいたからだ。

この定義は文の形式だけを規定したもので、次のような非分裂文を区別することができず、定義としてはきわめて不十分である。

- (2) a. 花子が作ったのはとてもまずかったのだ。
- b. 売れ残ったのはこれがすべてだ。
- c. 小さいのは収穫できないのだ。

これらの文で用いられている「ノ」は、いずれも代名詞として用いられたものである。例えば、(2a)では花子が作った「料理」、(2b)では「商品」、(2c)では「作物」などの名詞の代用として「ノ」が用いられているのである。

神尾(1990)は分裂文を次のように定義している。

分裂文は基本的には「～のはが・・・だ」というパターンを成し、・・・。分裂文では、焦点の位置の語句を前提の中の適切な位置におけば、通常の平叙文が得られなければならない。これは、与えられた文が分裂文であるか否かを決定する基本的な条件である。(神尾 1990:85-86)

(3) 花子が描いたのはこの絵だ。

(ibid:84)

神尾(1990)によれば、(3)では「この絵」を「描いた」の直前におき、助詞「を」を補えば「花子がこの絵を描いた」という平叙文が得られるため、この文は分裂文であると認めることができる。

神尾(1990)の定義では、(i)形式上「～のはが・・・だ」という構造を持ち、(ii)焦点の位置の語句を前提の中の適切な位置におけば、通常の平叙文が得られること、と規定されている。たしかに、この定義では渡部(1979)で問題となった(2a,b)を分裂文から排除することはできる。しかし、(2b)にあてはめてみると、(4)のように通常の平叙文が得られ、(2b)が分裂文であると誤った予測をしてしまう。先に述べたように、(2b)の「ノ」は代名詞として用いられたものである。このような問題は、「ノ」には、代名詞の用法と節を名詞化する名詞化辞(nominalizer)、もしくは補文標識(complementizer)の用法があることを区別していないために生じたものである。

(4) これが売れ残ったすべてだ。

西山(2003)は次のように分裂文を定義している。

「～のは・・・だ」という形式を有し、かつ対応する動詞文が存在する文。・・・「～」の部分は空所を含み、「・・・」の部分が空所を埋める焦点として機能しているのである。・・・「～のは」の「の」は補文標識にほかならない。(西山 2003:137)

この定義は、神尾(1990)の定義に加えて、「ノ」が補文標識であることを明示的に規定したものである。したがって、神尾(1990)では問題となる(2b)も正しく分裂文から排除することができる。ただし、西山(2003)は、「～のは・・・だ」文については、とくに倒置指定文という用語を用いていること、さらに「～のが・・・だ」という形式を持つ文は、「提示文」として他の文と区別していることに注意したい。

砂川(2005)では、分裂文は次のように定義されている。

節が主語になり、その節から特定の成分が取り出されて述部に位置付けられているコピュラ文を「分裂文」と呼ぶことにする。・・・分裂文は「～のは～だ」「～のが～だ」のように、ノを用いた構文である。この種のノは、節を受けて、その節全体を名詞相当の句に変える役割を果たしている。(砂川 2005: 206)
分裂文というのはコピュラ文の主語である節の中に含まれる不定の要素をコピュラ文の述語によって同定する文である。また、分裂文には意味の上で対応する非分裂文が存在する。(ibid.: 210)

西山(2003)が「～のは～だ」「～のが～だ」をそれぞれ倒置指定文、提示文と区別していたのに対し、砂川(2005)は両者を分裂文の範疇に分類した上で、「～のは～だ」(ハ分裂文)は後項焦点文、「～のが～だ」(ガ分裂文)は前項焦点文、及び全体焦点文に分類して論じている。砂川(2005)の定義は、(i)ハ分裂文、ガ分裂文を対象としていること、(ii)対応する動詞文の存在を明示していること、(iii)「ノ」が名詞化辞、あるいは補文標識であることを規定しているこ

と、など包括的にハ分裂文、ガ分裂文をとらえている。本稿では、砂川(2005)の定義にしたがって論を進めていくことにする。

1. 二種類のガ分裂文

日本語には、次に示すような2種類の分裂文があることが知られている。

- (5) 酒井君が買ったのはこの本だ。 [A のは B だ]
(6) 酒井君が買ったのがこの本だ。 [A のが B だ]

本稿では、(5)のような分裂文を「ハ分裂文」、(6)のような分裂文を「ガ分裂文」と呼んで区別することにする。分裂文を巡る研究は、分裂文のA項(前項)、B項(後項)を占める名詞句の意味的特性に基づき、上林(1988)、西山(1985)、熊本(1989a, b)らによって、さらに厳密な下位区分がなされている。本稿では、これらの下位分類の詳細には立ち入らないが、熊本(1989a)はハ分裂文とガ分裂文では指定の方向に違いがあり、ハ分裂文はB項でA項を指定し(Aの性質を持つものを探せば、それはBである)、ガ分裂文はA項でB項を指定する(Bの指示対象を探せば、それはAである)、と次の例を挙げて論じている。なお、本稿で対象とするのは、名詞化辞「ノ」を持つガ分裂文のうち名詞指定文に限ることとする。

- (7) それをやらせたのは太郎ではない。次郎だ。
(8) それをやらせたのが太郎ではない。止めようとしたのが太郎だ。

(7)は、誰がそれをやらせたかといえば、太郎ではなく次郎だ、という意味であり、(8)は、何者が太郎かといえば、それをやらせた人ではなく止めようとした人だ、という意味である。(7)では、誰かがそれをやらせたということが前提とされており、(8)では、何者が太郎であることが前提とされている。すなわち、ハ分裂文では、A項が前提部、B項が焦点部であり、ガ分裂文では、B項が前提部であり、A項が焦点部である、と熊本(1989a)は指摘している。

このようにこれまでの研究では、ハ分裂文の基本的な意味は、[Aであるものは何かというと、それはBである]であり、ガ分裂文の基本的な意味は、[Bであるものは何かというと、それはAである]というものである。すなわち、これらの研究では、ハ分裂文のA項は前提、B項は焦点となり、ガ分裂文のB項が前提であり、A項が焦点を担うと分析されてきた。

これに対し、天野(1995a, b)はガ分裂文には文脈によってA項が前提を、B項が焦点を担う場合がある、と次のように論じている。

- (9) 絵もインテリアの一部と考えるのがヨーロッパの人たちです。そのためには、インテリア全体の中で絵だけが浮いて見えないような工夫が必要です。このときいちばん大切なのがインテリアとの色合わせ。家具や小物の中の色を、絵のモチーフやマットの部分でもリピートして使うとリズム感が生まれ、空間が生き生きしてくるのです。
(天野, 1995a: 8)

(9)の文脈では、下線部のガ分裂文を「インテリアとの色あわせは何かというと、それは、このときいちばん大切なものだ」とA項を焦点として解釈するのは不自然であり、「このときいちばん大切なのは何かというと、それは、インテリアとの色合わせだ」というようにB項を焦点として解釈するのが自然である、と(天野, 1995a, b)は指摘している。このことから天野(1995b)は、ガ分裂文はA項に焦点があるものと、B項に焦点があるものの二種類がある、と主張し、前者を前項焦点文、後者を後項焦点文と呼んでいる。

(10) 二種類のガ分裂文

前項焦点文：「Bであるものは何かというと、それはAだ」という意味
後項焦点文：「Aであるものは何かというと、それはBだ」という意味

2. ガ分裂文の焦点

天野(1995a) は、ガ分裂文の後項焦点文は B 項が焦点を担うと指摘しているが、その根拠として、①A 項と B 項の間に「誰(何)だと思う」を挿入することができる、②A 項と B 項の間に「例えば」を挿入することができる、という二点を挙げている。

- (11) A: この写真の中でジュンは何の人なの?
B: ?帽子を被っているのが、誰だと思う?ジュンだよ (ibid: 12)
- (12) ゲストの中で特に注目したいのが、誰だと思います?, ニューヨーク・シティ・バレエのダーシー・キスラーですね。 (ibid: 13)
- (13) A: 今朝会った公一の父親は、以前もどこかであったよね?
B: ?昨日町内の集会で議長をしていた人が、例えば公一の父親だ。 (ibid: 15)
- (14) 彼にはたくさんの優れた作品がある。外国人にもよく知られているのが例えば『雪国』である。 (ibid.)

(11B)では、「ジュン」はすでに(11A)で話題に登場しているので、焦点とはなり得ない。したがって、このガ分裂文は前項焦点文であり、「誰だと思う」という疑問文を挿入することはできない。一方、(12)では、「誰だと思う」という挿入疑問文に答える形で「ダーシー・キスラー」が焦点として機能している。したがって、(12)は後項焦点文ということになる。(13B)も、(11B)と同じ理由で、前項焦点文であり、「例えば」という語句を挿入することはできない。これに対して、(14)は「例えば」が挿入されたことにより、『雪国』が他の複数の該当物の一部であるという意味で、焦点となっている。したがって、この文は後項焦点文ということになる。

天野(1995a)は焦点という用語を定義せずに用いてきたが、天野(1995b)では焦点を次のように規定している。

- (15) ある文(「A が B だ」文)の解釈に際して、聞き手に了解されていると仮定された、変項 X を含む命題「A が X だ」または「X が B だ」が前提であり、その X とイコールで結ばれる「X=B」または「X=A」が焦点である。「A が B だ」文において、前提を構成する名詞句を前提名詞句、焦点を構成する名詞句を焦点名詞句と呼ぶ。 (天野,1995b: 4-6)

例えば、(9)のガ分裂文では、「このときいちばん大切なものが X」(前提)、「X=インテリアとの色合わせ」(焦点)、と分析されることになる。

3. 天野(1995a, b)の問題点

天野(1995a, b)は、ガ分裂文に関して、B 項が前提で A 項が焦点であるという従来の見解に加え、A 項が前提で B 項が焦点であるようなガ分裂文が存在することを指摘した論考として評価できるものである。しかしながら、2 節で紹介した焦点の定義と焦点の判定方法について曖昧なところが残されていると思われる。

(15)の定義では、「X とイコールで結ばれる「X=B」または「X=A」が焦点である」と規定しているが、「X=B」、あるいは「X=A」を焦点と呼ぶのは不適切である。天野(1995b)の意図をくむならば、この部分は「前提命題における変項 X の値を指定するのが焦点である」とすべきである。そうすると、この定義自体は指定文のコピュラ文一般に当てはまることになる(cf. Declerck, 1988)。

問題は、この定義をもとに、あるガ分裂文が前項焦点文であるか、後項焦点文であるかということを決めることができるようにはなっていない、というところにある。変項 X が A 項にあるのか、あるいは B 項にあるのかということは、聞き手が推論して仮定しているのである。このことは天野(1995b)でも次のように指摘されている。

「A が B だ」文の A と B のどちらに焦点があるかは、その文が実際に用いられている文脈によってはじめて明らかになる。つまり、全く同じ形の文であっても、文脈によって A に焦点がある場合と B に焦点がある場合の両方の解釈の可能性があるということである。 (ibid.: 5)

この指摘はきわめて妥当なものと思われる。しかし、天野(1995b)は、ガ分裂文が用いられている文脈から、聞き手がどのように焦点を導くのかという推論過程については、全く述べていない。その代わりに、ガ分裂文のA項とB項の間に「誰(何)だと思う」、あるいは「例えば」を挿入することができるか否かということに基づき、操作的に焦点を判断しているのである。ところが、この操作的判定条件も実際の文脈に当てはめてみると、十分に機能しない場合がある。

- (16) ロシアに円借款断る一領土交渉の難航背景 20億ドル
ロシア政府が非公式に約20億ドルの環境円借款を要請したが、日本政府は「現時点では応じられない」とする返書をロシア側に送っていたことが、10日までに明らかになった。ロシアは日本の政府の途上国援助（ODA）の対象外というのが表向きの理由だが、領土問題で進展が見られない限り、ODAによる経済援助に応じるべきではないとする意見が政府内に強いためだ。
(朝日新聞, 03/11/99)
- (17) a.ロシアは日本の政府の途上国援助（ODA）の対象外というのが、何だと思う、表向きの理由だ(よ)。
b.ロシアは日本の政府の途上国援助（ODA）の対象外というのが、例えば、表向きの理由の一つだ(よ)。

(16)の下線部はガ分裂文である。これに「何だと思う」、「例えば」を挿入したものがそれぞれ(17a)、(17b)であるが、いずれも適格文であると思われる。したがって、天野(1995a,b)に従えば、(16)のガ分裂文は後項焦点文、すなわちガ分裂文のB項である「表向きの理由」が焦点ということになるはずである。これはまた、このガ分裂文のA項は前提を担っているという判断が下されることに他ならない。しかし、これは言語事実を正しくとらえているとは言い難い。(16)の先行文脈をよく見てみると、ロシアからの円借款の要請に対して拒否の返書を送っていることが述べられている。一国の要請に対し拒否の回答をする場合には、何らかの正当な理由が存在する、と考えるのが国際政治の常識であろう。そうすると、B項はむしろ前提であり、なぜ拒否するのかという理由が示されているA項がこのガ分裂文の焦点である、と考えるべきであろう。同様の例を見てみよう。

- (18) 企業スポーツ―苦境を変革のバネに
長引く不況のあおりを受けて、スポーツチームを手放す企業が相次いでいる。(中略)企業スポーツは元来、景気や産業構造の変化の影響を受けやすい。それにしても、バブル経済の崩壊以降のここ数年、企業の撤退は例を見ない規模で広がっている。
なぜ、こんなことになったのか。社員のレクリエーションや福利厚生の一環として始まったのが、企業スポーツの出発点だ。労使対立の激しかった時期には、チームの応援を通じて社員の一体感を養うなど、労務対策の色彩も帯びた。
(ibid., 03/10/99)
- (19) a. 社員のレクリエーションや福利厚生の一環として始まったのが、何だと思う、企業スポーツの出発点だ(よ)。
b. 社員のレクリエーションや福利厚生の一環として始まったのが、例えば、企業スポーツの出発点の一つだ(よ)。

(18)のガ分裂文に「何だと思う」、「例えば」を挿入した例が(19a)、(19b)である。いずれも適格文であることから、天野(1995a,b)に従えば、(18)のガ分裂文は後項焦点文ということになるが、これは正しくない。先行文脈で話題になっていたのは、企業スポーツである。その出発点は何かというと「社員のレクリエーションや福利厚生の一環」である、というのがこの文の趣旨である。したがって、このガ分裂文はA項を焦点とする前項焦点文ということになる。

前項焦点文でありながら、「何だと思う」、「例えば」を挿入することができる例は、収集したガ分裂文の前項焦点文85例のなかにも散見される。一方、収集した後項焦点文について、同様の調査をしてみると、すべての例について「何だと思う」、「例えば」を挿入することができる。これを整理すると、次のようにいうことができる。すなわち、後項焦点文であれば「何だと思う」、「例えば」を挿入することができるが、「何だと思う」、「例えば」を挿入することができるからといって、そのガ分裂文がすべて後項焦点文であるということとはできない。したがって論理的には、「何だと思

う」,「例えば」を挿入することができるというのは、そのガ分裂文が後項焦点文であるための必要条件であるが、十分条件ではないといえることができる。すなわち、天野(1995a,b)が提案する後項焦点文の判定条件は論理的に不備があり、前項焦点文と後項焦点文を判別するには不十分であると結論づけることができる。

4. ガ分裂文を巡る砂川(2005)の議論

天野(1995b)は、(10)に示すように、ガ分裂文はA項に焦点があるものと、B項に焦点があるものの二種類がある、と主張し、前者を前項焦点文、後者を後項焦点文と規定している。これに対して砂川(2005)は、(i)プロソディックな強勢を置けるか、(ii)「だけ」による限定ができるか、(iii)否定文にできるか、という3つの観点から、ガ分裂文を分析し、天野(1995b)の後項焦点文を認めず、ガ分裂文は前項焦点文と全体焦点文の2種類に分類できると主張している。

4. 1 ガ分裂文とプロソディックな強勢

砂川(2005: 103)は、文の焦点はその部分にプロソディックな強勢を伴って発話できるが、天野(1995b)が後項焦点文とする次の文では、焦点である述語名詞句だけに強勢がかけられるはずであるが、これは事実と反する、と主張している。

- (20) a. はじめにキツネが飛び出しました。次はネズミが顔を出しました。そして、最後に出てきたのが、
なんと見たこともない大きな動物でした。
b. 丈夫な品種がたくさんある。特におすすめなのがこれだ。 (ibid: 102)
- (21) a. ?そして、最後に出てきたのが、なんと見たこともない大きな動物でした。
b. ?特におすすめなのがこれだ。 (ibid: 103)

砂川(2005: 103)は、(21a)、(21b)の焦点である太字部分を強く読むと不自然に感じられると指摘し、「これらの文に強勢を置くとするなら、述語名詞句だけでなく、主語名詞句の方も強めて読むのであればならないだろう。このような主語名詞句を焦点ではなく前提であるとする天野の説には問題があるといわなければならない。」と結論づけている。

しかし、この議論は文の容認性のとらえ方に問題がある。筆者が調べた範囲では、(21a)の太字部分を強く読んでも全く不自然とはならない、という意見が大半であった。(21b)についても、場面の中で「これ」を直示的に用いた場合、強く発音することは全く問題ない、との回答であった。

砂川(2005: 105)は、(20a)、(20b)のガ分裂文は「述語名詞句だけでなく主語名詞句も含む文全体が焦点として表されている「全体焦点文」であると考えべきである。」と結論づけている。このように考えると、(21a)、(21b)は文全体が焦点とされるので、文全体にプロソディックな強勢を伴って発話されることになる。

- (22) a. ???そして、最後に出てきたのが、なんと見たこともない大きな動物でした。
b. ??? 特におすすめなのがこれだ。

(22a)、(22b)の容認性を調べてみると、(21a)、(21b)に較べるとはるかに低くなる、という回答が大半であった。これらのことから、砂川(2005)のプロソディックな強勢という観点からの議論は妥当性を欠くと言わざるを得ない。

4. 2 ガ分裂文と「だけ」による限定

砂川(2005)は、後項焦点文「～は～だ」は「だけ」による限定が可能であるのに対し、「～が～だ」文は「だけ」による限定が不可能であることから後項焦点文とは認められない、と主張している。

- (23) 洋楽をはじめ、外国語レッスンなど、世界にふれるチャンネルだけでも100曲以上。
a. なかでも、リアルタイムでお届けする海外FMは「ゆうせん」だけ。
b. *なかでも、リアルタイムでお届けする海外FMが「ゆうせん」だけ。 (ibid: 103)

(23a)のように後項焦点文「～は～だ」は、「だけ」によって限定することができるが、「～が～だ」文を「だけ」によって限定すると(23b)のように非文となる。

砂川(2005: 104)は、これを次のように説明している。後項焦点文「～は～だ」は、「 α がXであること」を前提と

し、その X が Y であることを述べる文である。ここでは、他の可能性を排除した限定的な同定「X が Y だけであること」を述べるができる。したがって、後項焦点文は「だけ」による限定が可能となる。いまここで、「～が～だ」文が後項焦点文であるとするなら、「～は～だ」文と同じように「だけ」による限定ができなければならない。ところが、(23b)のようにこれが不可能であることから、「～が～だ」文は後項焦点文とは認められない。

そこで、筆者が収集した分裂文を分析してみると、分裂文の焦点に限定詞「だけ」が生じている例は、664 例(ハ分裂文 449 例、ガ分裂文 215 例)中 18 例がこれに該当した。(24)はその一部である。

- (24) a. しかし、ぼっ起不全の原因となった病気そのものの治療については、カルテなどを明確に区別していれば、保険が適用される。パイアグラは昨年暮れの時点で、世界 53 カ国で承認され、33 カ国で販売されている。そのうち保険給付の対象となっているのはスウェーデンと米国の一部の州だけ。 (朝日新聞 3/10/99)
- b. 要するに、会社とは何か、経営とは何か、といったことは考えずに、格好だけつけていたんです。で、気がついたときは、もう遅かった」 事業がうまくいったのは、最初の数ヵ月だけ。新しさに引かれて客が集まり、メーカーは調子のいい言葉を並べて自社に都合のよい製品を押しつけた。 (週刊現代、3/13/99)
- c. ホルブルック氏はベオグラード入り後、記者団に対し「我々は最も緊迫した状況にある。平和的解決を目指す、思うような結果が得られなければ武力行使に出ることも辞さない。この悲劇を食い止められるのはユーゴ政府の態度だけだ。長々と交渉するつもりはない」と語った。 (朝日新聞 3/23/99)
- d. 火を付けたのは、規制緩和のなかで登場した新顔 2 社だ。「機内で出せるのは水とお湯だけ」と簡素なサービスを強調するのは、昨年の暮れから羽田と新千歳を結ぶエア・ドゥ。 (ibid.)

これらを見てみると、「だけ」が生じている分裂文は、いずれもハ分裂文である。ガ分裂文の焦点に「だけ」が生じている例は一例もなかった。このことから、直ちに砂川(2005)の主張が正当化されるわけではない。

砂川(2005)は、「ある文が後項焦点文であれば、「だけ」による限定が可能である」と論じている。この場合、「だけ」によって限定できるということは、ある文が後項焦点文であるための必要条件である、と述べていることになる。すなわち、この条件から、ハ分裂文は後項焦点文であることから、その焦点は常に限定詞「だけ」と共起できるという論理的帰結が得られる。この条件が実際の言語事実を正しくとらえているか、次の例で見てみることにする。

- (25) a. 最後にこの道を通ったのは、妻の節子が死んで一年経ったときだった。(板東真砂子、『死国』)
b. *最後にこの道を通ったのは、妻の節子が死んで一年経ったときだけだった。
- (26) a. サッチャー首相でさえ手をつけなかった国立博物館などの「独法」化を断行するというのである。リストに載っているのは東京、京都、奈良の博物館、西洋美術館や科学博物館、国語研究所、文化財研究所その他。 (朝日新聞 2/28/99)
b. *リストに載っているのは東京、京都、奈良の博物館、西洋美術館や科学博物館、国語研究所、文化財研究所その他だけ。
- (27) a. 日本の金融システムが混乱し、世界的な恐慌などに発展しかねないとなれば、政府は迅速な対応を求められる。
しかし、それは一省庁の手に負える問題ではない。首相が陣頭に立つべき事態である。大蔵省に財政と金融の権限を持たせておく口実にはならない。この国の行政に一番欠けていたのは、官庁間、政策当事者間、そして官と民の、よい意味での緊張関係である。 (朝日新聞 3/7/99)
b. *この国の行政に一番欠けていたのは、官庁間、政策当事者間、そして官と民の、よい意味での緊張関係だけである。
- (28) a. 自民党は 8 日、企業が持つ土地の含み益を使って自社株買い入れ消却ができるようにするため、昨年 3 月施行の土地再評価法を改正する方針を固めた。再評価益の 3 分の 2 を上限に消却原資とすることを認めるもので、株価を維持しながら持ち合いを解消する手立てにもなる。・・・
今回の改正案は、再評価益を株主への配当に回さないことを前提に資本の部に計上し、取り崩して自社株消却の原資に充てることを認める。上限額を 3 分の 2 とするのは、地価が下がる場合

に備えるためだ。さらに、2年間の時限立法だった同法を1年延長し、2001年3月期決算まで適用できるようにする。(朝日新聞 3/9/99)

b. ??上限額を3分の2とするのは、地価が下がる場合に備えるためだけだ。

(25a), (26a), (27a), (28a)の下線部は、いずれもハ分裂文で、後項に焦点を持つ後項焦点文である。砂川(2005)によれば、これらは後項焦点文であるので限定詞「だけ」と共起できるはずである。しかし、焦点部に「だけ」を付け加えると、(25b), (26b), (27b), (28b)に見るように、いずれも不適格となるか、あるいは適格性が著しく低下することが分かる。このことから、「ある文が後項焦点文であれば、「だけ」による限定が可能である」と主張する砂川(2005)の議論は、ハ分裂文に関する言語事実を的確に捉えているとは言い難い。言い換えれば、「「だけ」によって限定できるということは、ある文が後項焦点文であるための必要条件である」という論理は成立しないことになる。したがって、「後項焦点文「～は～だ」は「だけ」による限定が可能であるのに対し、「～が～だ」文は「だけ」による限定が不可能であることから後項焦点文とは認められない」と主張する砂川(2005)の論拠は妥当性を欠くといわざるを得ない。

ハ分裂文、ガ分裂文と限定詞「だけ」の共起の問題は、むしろ総記的含意の問題としてとらえるべきであると思われる。「～が～だ」文は、通例、総記的含意を伴うため、限定詞「だけ」を用いてさらに限定を強める必要はない。一方、「～は～だ」文は、総記的含意を伴う場合もあれば、そうでない場合もある。このため他の可能性を積極的に排除することを明確化するには限定詞「だけ」を伴う必要があると考えられる。このことは、次のように(23a)から「だけ」を除くと容認性が低くなるのに対し、(23b)は「だけ」を省くと適格文になることから確認できる。

(29) a. ?なかでも、リアルタイムでお届けする海外FMは「ゆうせん」だ。

b. なかでも、リアルタイムでお届けする海外FMが「ゆうせん」だ。

「なかでも」という取り立て詞は、複数の可能な候補者の中から条件に合致するものを絞り込む、という機能を持つ。(29a)の容認性が低いのは、この「なかでも」という取り立て詞の絞り込み機能が、「～は～だ」文のみでは十分に保証されないためである。したがって、これを補うために「だけ」という限定詞が必要となるのである。一方、(29b)では、取り立て詞「なかでも」の絞り込み機能は、「～が～だ」文の総記的含意によって十分に保証され、他の要素を排除することができるので、適格文となるのである。(23b)が不自然なのは、限定詞が不必要な環境で「だけ」が用いられたためである。

4. 3 ガ分裂文と否定

砂川(2005)は、後項焦点文「～は～だ」は否定文が可能であるのに対し、「～が～だ」文は否定文が不可能であることから後項焦点文とは認められない、と主張している。

(30) a. 特におすすめできるのはこれだ。

b. 特におすすめできるのはこれではない。

(31) a. 特におすすめできるのがこれだ。

b. *特におすすめできるのがこれではない。

(ibid. 104)

砂川(2005: 104)は、(30b)の否定文が発せられるためには、「特におすすめできるのはどれか」という問いが問題になるような状況において、「特におすすめできるのはこれだ」という主張が、事前の発話や場面から推論によってあらかじめ成立している必要があると指摘し、(30b)はその主張を否定するために用いられていると述べている。(31a)のガ分裂文が後項焦点文であるならば、同じ状況のもとで同様の主張を否定する(31b)が成立するはずであるが、実際には不適格となっている。その理由は、(31a)の情報構造が後項焦点文とは異なっているからである、と砂川(2005)は主張している。

ところが、(30b)が発せられる状況をもう一度よく見てみると、砂川の分析は自らの分裂文の定義に抵触していることが明らかになる。すなわち、(30b)は分裂文とは認められないことになる。ここで砂川の定義を再掲することにする。

節が主語になり、その節から特定の成分が取り出されて述部に位置付けられているコピュラ文を「分裂文」と呼ぶことにする。…分裂文は「～のは～だ」「～のが～だ」のように、ノを用いた構文である。この種のノは、節を受けて、その節全体を名詞相当の句に変える役割を果たしている。(砂川 2005: 206)

分裂文というのはコピュラ文の主語である節の中に含まれる不定の要素をコピュラ文の述語によって同定する文である。また、分裂文には意味の上で対応する非分裂文が存在する。(ibid.: 210)

この定義によると、分裂文は(i)節が主語になり、その節から特定の成分が取り出されて述部に位置付けられているコピュラ文である、(ii) コピュラ文の主語である節の中に含まれる不定の要素をコピュラ文の述語によって同定する文である、(iii) 対応する非分裂文が存在する、という条件を満たしていなければならない。

(30) a. 特におすすめできるのはこれだ。

(32) これが特におすすめである。

ハ分裂文(30a)は、(32)のような非分裂文から「これ」が取り出されて述部に位置付けられることによって導かれた分裂文である。また、同時に「特におすすめできる不定の要素 X」を「これ」で同定している文である。したがって、(30a)は非分裂文(32)から導かれた分裂文であるといえる。

次に(30b)を見てみると、この文は単独で発話された場合、不自然であると判断されることが多い。(30b)が容認されるのは、砂川も認めているように、「特におすすめできるのはどれか」という問いが問題になるような状況において、「特におすすめできるのはこれだ」という主張が、事前の発話や場面から推論によってあらかじめ成立している場合である。(30b)はその主張、すなわち[特におすすめできるのはこれだ]を否定しているのである。このことを明示的に表示すると次のようになる。

(33) a. [s₁ [s₂ 特におすすめできるのは]これだ + ない]

b. [s₁ [s₂ 特におすすめできるのはこれで]はない]

ここで問題となるのは、分裂文の定義(ii)の部分である。(33)では、「特におすすめできる不定の要素 X」を「これ」で同定しているのではなく、「これではない」と否定しているのである。これは、明らかに定義(ii)を満たしていないことになる。

また、定義(iii)についても問題となる。すなわち、否定分裂文(30b)に対応する非分裂文が存在しないことである。ここで、もし(30b)に対応する非分裂文が存在すると仮定すると、次のような不自然な文を想定しなければならなくなる。

(34) ??これではないものが特におすすめできる。

さらに、砂川は否定分裂文(31b)が不適格であるのは、後項焦点文とは情報構造が異なるからである、と結論づけているが、その根拠については全くふれていない。すなわち、否定分裂文の成立条件と当該の分裂文の情報構造がどのような関わりを持っているのか明らかにしていない。この点も論理的不備として指摘することができる。

これまでみてきたガ分裂文とプロソディックな強勢(4.1)、「だけ」による限定(4.2)、及び否定分裂文の議論(4.3)から、砂川(2005)の「～が～だ」文は後項焦点文ではないとする議論は妥当なものとはいえないことが明らかになった。

5. ガ分裂文の談話機能

ガ分裂文が談話の中でどのような機能を果たしているかという点について、加藤(1999)は関連性理論の枠組みから、次のような提案を行っている。

- (35) 前項前景文: A 項が前景情報を担い、B 項が背景情報を担っているようなガ分裂文
後項前景文: B 項が前景情報を担い、A 項が背景情報を担っているようなガ分裂文 (加藤 1999: 9)
- (36) 前景情報とは、文脈効果を持っていることで、それ自体で関連性のある情報である。背景情報とは、必要とされる処理労力を減らすことによって間接的にしか関連性に貢献しない情報である。
(加藤 ibid., Sperber and Wilson 1986/1995:217)

(35)における A 項と B 項は、それぞれガ分裂文「～のが～だ」の「～のが」と「～だ」に相当する。また、以下の議

論では、前項前景文を前項焦点文、後項前景文を後項焦点文と読み替えて論じていくことにする。

5. 1 前項焦点のガ分裂文の談話機能

報道文から収集した 83 例の前項焦点のガ分裂文を見てみると、B 項には一定の限られた語いが生じる傾向にあることが分かる。その上位 5 位までの語いを挙げると、「ねらい」(13 例, 15.7%), 「きっかけ」(5 例, 6%), 「実情」(5 例, 6%), 「特徴」(5 例, 6%), 「現状」、「目的」、「本音」(各 4 例, 3.6%)である。

- (37)a. これまでの準備会合で、包括的な協議として交渉期間は 3 年間程度にするという点で日本と EU は一致している。米国は自国の関心のある分野での合意を優先させたいのが本音だ。
(朝日新聞, 03/27/99)
- b. 資産家が多く、金融資産の厚い京都には大手、準大手、外資系証券などがひしめきあい、野村にならうように「資産管理型営業」を掲げている。しかし、コストがかかるわりに収益にすぐに結びつかないため、どこも定着には苦勞しているのが実情だ。
(ibid., 03/25/99)

これらの B 項は、A 項と先行文脈との関係を示唆することにより、ガ分裂文の解釈に関わる処理労力の軽減に貢献していると考えられる。また、前項焦点文の B 項は一定の限られた語いが占める傾向にあるという言語事実からもこのことを確認できる(加藤 1999)。

5. 2 後項焦点のガ分裂文の談話機能

後項焦点のガ分裂文の機能は、A 項が背景情報を担い、B 項が前景情報を担っていると考えられる(ibid.: 9)。後項焦点文の具体例を見てみよう。

- (38) 大気に含まれるダイオキシン濃度を正確に調べるためには、通常、年間 50 回ほどの測定が必要とされる。だが、新芽の頃から 3-4 ヶ月を過ぎると、その後はほぼ一定したダイオキシン濃度を示すクロマツの葉なら、1 回の採取・分析で、その地域の相対的な汚染度がわかる一。この手法で調査を続けるのが、ダイオキシン研究の第一人者である摂南大学薬学部教授の宮田秀明氏である。
(週刊現代, 03/13/99)
- (39) 細かい自衛隊の運用や行政の活動内容まで国会に可否を問うのでは緊急事態に身動きが取れなくなる可能性があるため、対象を限定して修正案を調整することにした。こうした中で出てきたのが自衛隊の活動に限るという案だ。
(朝日新聞, 03/31/99)
- (40) ところが、日野長官は文書の存在ばかりか、当時の銀行局幹部の署名と印が押されていることまで暴露し、国会では大蔵省の《虚偽報告文書》だと大問題に発展している。これに怒ったのが大蔵省の中井省国際局次長だ。中井氏は昨年 6 月に大蔵省から金融監督庁が分離されるまで銀行局担当審議官を務め、日債銀救済の陣頭指揮をとってきた人物。当時の山口公生銀行局長と並んで国会でも追及の矢面に立たされている。
(週刊ポスト, 03/12/99)

(38)のガ分裂文の A 項では、指示代名詞「この」が用いられている。さらに、「この手法」は先行文脈で話題となっているダイオキシン濃度の測定法のことである。(39)のガ分裂文の A 項でも、指示代名詞「こ」が用いられ、「こうした中で」は先行文脈で話題となっている修正案を巡る調整作業のことに言及している。(40)も同様である。このように、(38)-(40)の A 項は、先行文脈と何らかの意味的關係を表すことにより、ガ分裂文の処理労力軽減に貢献していることは明らかである。

これらの例のように、後項焦点文の A 項に代用表現が用いられているのは、収集した 33 例中 21 例あり、全体の 63.6%を占める。また、A 項が先行文脈の話題と何らかの意味的關係を持つものは、33 例中 30 例に及び、全体の 90.9%を占めている。

報道文・週刊誌から収集した 33 例の後項焦点文を分析すると、次の 2 つの特徴が明らかになった。

- (41) a. 後項焦点文の A 項には、代用表現(語彙的繰返しを含む)の出現率が比較的高い。
b. 後項焦点文の A 項は、先行文脈の話題と何らかの意味的關係を持つ傾向がきわめて高い。

さて、(40)の記事をもう一度よく見ると、ガ分裂文のB項に現れた「中井省国際局次長」は、後続する談話で新しい話題となっていることに注目したい。これに先立つ先行文脈では、日債銀救済のマル秘文書（マル秘文書とは、日債銀救済のマル秘文書であることが話題となっている。ガ分裂文は、この話題を受け、さらに後続の談話で新しい話題となる「中井省国際局次長」をB項に登場させている。すなわち、後項焦点文のB項は、先行文脈の話題を断ち切り、新しい話題を導入するという機能を果たしていると考えられる。類例を見てみよう。

- (42) まず野村総研は米国の会計基準で年金財政を公表している主要企業23社を対象に決算書を分析し、積み立て不足を3兆9300億円と試算。さらに対象企業を資本金1億円以上の大企業（2万9000社）に広げた長銀総研の試算では45兆円の積み立て不足とみられており、日本企業全体で試算した大和総研の数字はなんと75兆8000億円の不足が生じているという内容である。

最も厳しい見方をしているのが米国系証券会社ゴールドマン・サックス証券の分析だ。『津波警報』と題する同社のレポートでは、東証1部上場企業1332社（従業員数467万人）の積み立て不足は最低57兆円、最大80兆円に達すると分析し、次のように警鐘を鳴らしているのである。

（週刊ポスト,3/19/99）

- (43) 戦力で圧倒的にまさる横浜だが、前半から守備を固める平塚相手に、いま一つリズムが出ない。そんな中で目立ったのが永井の動きだ。ダイレクトでパスをつないだかと思えば、スペースがないと見るや速さのあるドリブルで突っかける。持ち味を発揮して、チームを引っ張った。

（朝日新聞,03/7/99）

(42)では、ガ分裂文の先行文脈では、大和総研の試算が話題となっている。ガ分裂文に後続する談話では、ガ分裂文のB項を占めるゴールドマン・サックス証券の分析が新しい話題として導入されている。また、(43)では、横浜がリズムに乗れないことが話題となっているが、ガ分裂文に後続する談話では、ガ分裂文のB項にある「永井の動き」が新しい話題となっている。これらことから、後項焦点文のB項は、次のような談話機能を担っていると考えることができる。

- (44) 後項焦点文のB項は、先行文脈の話題を断ち切り、新しい話題を導入する機能を持つ。（話題転換機能(topic shift)）

収集した後項焦点文のデータを集計してみると、後項焦点文33例中26例、すなわち全体の78.8%でこのような話題の転換が確認された。

本項では、分裂文の定義を明らかにした上で、砂川(2005)の「～が～だ」文(ガ分裂文)は後項焦点文ではないとする議論は妥当なものとはいえないことを明らかにし、関連性理論の枠組みからガ分裂文の談話機能(41), (44)について論じた。

*本研究は、日本学術振興会平成19—20年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号No. 19520417の援助を受けて成された研究の一部である。

参考文献

- 天野みどり (1995a) 「「が」による倒置指定文…「とくにおすすめなのがこれです」という文について…」『人文科学研究』88, 1-21. 新潟大学人文学部
天野みどり (1995b) 「後項焦点の「AがBだ」文」『人文科学研究』89, 1-24. 新潟大学人文学部
加藤雅啓 (1999) 「報道文におけるガ分裂文について」*International Journal of Pragmatics* vol. IX 日本ブ

- 神尾昭雄 (1990)『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店
- 神林洋二 (1988)「指定文と措定文」『筑波大学文藝言語研究・言語編』14: 57-74.
- 熊本千明 (1989a)「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17: 11-34.
- 熊本千明 (1989b)「指定と同定---「…のが…だ」の解釈をめぐる」大江三郎先生追悼論文集編集委員会編『英語学の視点』九州大学出版会 pp. 307-318.
- 三上 章 (1953)『現代語法序説』刀江書院 1972年復刊 くろしお出版
- 砂川有里子 (1995)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」, 仁田義雄編『複文の研究』(下) くろしお出版 pp.353-388.
- 砂川有里子 (2005)『文法と談話の接点: 日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版
- 西山佑司 (1985)「措定文・指定文・同定文の区別をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17: 135-165.
- 西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 渡部真一郎 (1979)「日本語の分裂文について」, 林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会 編『英語と日本語と』くろしお出版 pp.405-423.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*, Leuven: Leuven University Press.
- Sperber D. and Wilson, D. (1986/1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.

Semantic Functions of *Ga*-clefts

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article deals with the functional properties of Japanese *ga*-clefts in news reports. The main points argued here are (i) that Amano's (1995a, b) test framework which is designed to distinguish two options for *ga*-clefts is not in fact sufficient to do so; (ii) that in the framework of Relevance Theory, an alternative analysis can be proposed which claims that *ga*-clefts can be adequately accounted for without appealing to the semantic/pragmatic notions such as presupposition and focus, information structure, "direction of specificity" and so on; and (iii) that Japanese *ga*-clefts can be classified into three subcategories.

*Humane Studies and Social Studies Education

補遺 1

談話における日本語分裂文に生起する取り立て詞「なかでも」データベース

<http://news.livedoor.com/article/detail/3667513/>

ガ分裂文，なかでも

塾長：「塾長の大金貯世(おおがねためよ)である！」

塾長：「最近、海外市場のなかでも注目されているのがベトナムだ。われわれの世代にはベトナム戦争が強烈な記憶として残っているが、そのベトナムも今や経済成長がめざましく、多くの企業が進出している。今回も、麒麟ビバレッジ＝麒麟 HD(2503)がベトナムへ進出した」

Livedoor news

080910

一九七七（昭和五十二）年に発売され、マイコン少年、マイコン青年たちのバイブルともいべき存在となった、安田寿明（当時、東京電気大学助教授）の『マイ・コンピュータ入門』。その一節を読んで、後藤と加藤は思わずほくそえんだ。安田は、TK-80のマニュアルを、次のように評価していたのである。

「キットに付属しているカタログ・マニュアル類のうち、『 μ COM-80トレーニング・キットTK-80ユーザズ・マニュアル』（マニュアル番号IEM-560）の内容は、抜群のできばえである。――TK-80の場合、そのマニュアルはマイクロ・コンピュータの自作・組み立てから利用にいたるまでの、懇切ていねい、微に入り細をうがった執筆ぶりである。なかでも笑い出したのは、MOS型LSIの取り扱い注意である。驚異的能力を持つにもかかわらず、MOS型LSIは、静電気に弱い。そこでTK-80マニュアルでは『静電気に対して万全を期したい方は、台所に行ってください。たぶん、そこには、ステンレスの流し台があると思います』とある。これは、まさに、そのとおりである。マイクロコンピュータの組み立て作業台として、台所のステンレス流し台ほど絶好最適の場所はない。ちゃんと水道管でアースがとられている。万全の静電気対策作業台である。」（『マイ・コンピュータ入門』講談社）

ここまでのTK-80作りを独断で進めてきた渡辺和也は、当時の日電の社風にはいかにもなじまない、プラスチックモデルを思わせるはでな箱に収めたキットを、役員の参加する事業会議に提出した。独断で進めてきたといっても、ことさらに何か構えがあったわけではない。あくまでマイクロコンピュータを売るための手段。確かに値段はつけたものの、商品という意識は薄い。教材を広めるための出血大サービス価格、景品まがいといった意識だった。

会議の席でも、えらく風変わりで高級なカタログを作り、やむをえずそれに値段をつけたといったニュアンスで、すんなり受け入れられた。ただ一つ注意を受けたのは「どうせそんなもの余るから、作りすぎるなよ」との一点。一ロット三〇〇台で、せいぜい三ロット九〇〇台もはければおんの字と踏んだ。

一九七六（昭和五十一）年八月三日、TK-80発売開始。

秋葉原の電気街に流すとともに、通常、ICやLSIなどの電子デバイスを流しているルートにも乗せられた。

そして翌九月十三日、秋葉原駅前に新築されたラジオ会館の七階に、これもマイクロコンピュータ普及のためのサービスルームとしてNECビット・インが開設される。

日電が働きかけ、電子デバイスの販売特約店である日本電子販売が開設したビット・イン。電子デバイスの並べられたビット・インの一角にはTK-80の修理、相談コーナーが設けられ、マイコン販売部の技術スタッフ、後藤富雄や加藤明たちが交代で詰めることになった。

(2000 年 7 月改訂) (2001 年 2 月再改訂)

なかでも、とりたて、ハ分裂文

これは去年の七夕で知ったことだが、彼はブラッサンスが好きだそうである。ただし、歌いぶりを比較すると、ブラッサンスにはほとんど似ていない。むしろ、影響は詞だろうか。ブラッサンスに格別詳しいわけでもない僕には断定はしかねるが、例えば「アル中の唄」に見られるような、言葉の断片をそっけなく重ねていくだけでそこに個性的なドラマが生まれてくる詞のスタイル。そこから学んだものは確実にあったにちがいない。

昔、柄にもなくシャンソンを集中的に聴いた時期のことを思い出す。その頃のシャンソンの根城だった銀巴里にも何度か出かけた。しかし、僕にとってそこは違和感だけが支配する世界だった。どの歌い手を見ても、フランスから運んできたものは気取りとファッションでしかなく、言葉はがらくた同然だった。当時の記憶を重ねると、ひょっとするとひがしのひとしはシャンソンの最良の部分——そう、シャンソン・リテレールの精髓だ——を正当に受け継いだ唯一のシンガーなのかもしれない。この発見は、僕を興奮させるに充分だった。

興奮は人を馬鹿者にする。続く豊田勇造、そして三浦久のステージには十分な集中ができなかった。豊田勇造のステージでは「おれの妹です」と紹介されて出てきた笹野みちるを加えた「二階のおばちゃん」のあっけらかんとした楽しさが、三浦久のステージでは前日に引き続く「ヴィクター・マトムの歌」の充実ぶりが印象に残っている。ぼんやり眺めるうちにコンサートは終幕に近づき、ステージには古川豪がいた。

ひがしのひとしと同じく、この日の古川豪もまた前日とはうってかわったパフォーマンスを披露した。なかでも印象的だったのは、商店街の歌が一段落したあと、原発への抗議運動の中で歌われたらしい作品をはさんで歌われた、おそらくは暇さえあればダイビングに明け暮れているという彼の体験から生まれてきた作品なのだろう、海と生命をテーマにした歌。彼は歌った。

海が死ぬるとき

おれも死ぬるだろう

この短いフレーズには、社会的なあるいは政治的な発想からつくられたどんな「抗議の歌」よりも鋭くて豊かなメッセージがある。彼はこの歌ではほとんど説明を回避している。そこでは、例えば自分がもぐった海中で見えるものが淡々と描写されるだけ。歌は、そこからいきなりこの短いしかし決定的なフレーズへと飛ぶ。そして、それは聴き手に無言の問いかけを発する。おれは何者なのか、人間は何者なのか、お前たちは何者なのか、と。

このとき、僕はようやく気づいた。古川豪はいかにも実際の商店主らしいやわらかな笑顔で商店街を歌う。それらの歌は聴いていて楽しく、笑いをたっぷり提供してくれるが、描かれる人物がたちまち類型化しそうなあやうさがそこには同居している。おそらく、この種の歌だけでは、彼は「現代の商店街の人間模様をおもしろおかしく描写する風変わりな歌い手」といわれるにとどまるだろう。

なかでも、とりたて、ハ分裂文

古いといえね、ここにはいわば宝物殿か資料館かといった蔵までありまして、僕は書画骨董には門外漢ですが、古文書に実に面白いものがあるんです。

「秋は更けて新酒を造らんと思わば、日暮れて街の真中に、はだし足にて立ち、地に涼しみあるときは造り始めるなり、あたたかみあれば造らじ、よくよくこれを考え見るべし」

“元禄時代以来酒造伝記録”という一文ですが、その触りの一節を僕は暗記したんです。貴方も酒には関心がおありのようだから、おおよその意味はお分かりでしょう。いまでは工場ぐるみ冷房して年がら年中仕込みっ放しの大手もあるようですが、発酵は低温でしなくちやいい酒ができないのは古今同じ。その機をみる術を教えているわけですね。

この伝記録には続きがありまして、なかでも驚いたのは、酒の味をきれいにするために焼酎を加えろと。これは今日でも行なわれるアルコール添加です。そんな技術が元禄時代からあったんですね。

いずれにせよ、「秀よし」の“宝物蔵”は過去へのタイムトンネルですよ。当主は一六代目なんですが、では長野で創業以前の鈴木家がどこで何をする家だったか、これはつい近年まで分からなかったそうです。それがある日、社長が無聊で蔵にあった手文庫を開けてみたと思って下さい。するとその蓋の裏側に、「伊勢国某郡、油屋某」とあるのを発見した。

この方は酒造りに限らず何事にも探究心旺盛な方ですから、早速に伊勢へ飛んでその町のお寺の過去帳を調べたんですな。それで先祖が、伊勢で油屋を営んでいた事実を突き止められたそうですよ。

ついでに「秀よし」という酒銘の由来もお話ししますとね、たしか宝暦年間までここは「初嵐」という銘柄で出していたんです。それをあるとき佐竹の殿様に献上したところ、いたく御意に召しましてね、これは従来の御用酒「清正」に勝るっていうんで、「秀よし」の銘を賜ったといいます。この壱はね、長野の“※摺歌（もとすりうた）”って、酒造りの労働歌にもあるんです。

さっき一盞（いっさん）で浮かんだ酒蔵の風景はさらに肉付けされ、秋田の古い酒造りの町を流れる小川に、藻が揺らめきだした。

うつつの店では書き入れを過ぎ、壁の品書き札があらかた裏返っている。紳士の声は一律だが、周囲の喧騒が減った分だけ熱弁の度を増したように聞こえる。

それにしても、さほど大きくもない蔵の「秀よし」が、なぜ三〇〇年もの歴史を長野の地に営むことができたのだろう。

伽藍とバザール (The Cathedral and the Bazaar) Eric S. Raymond 著 山形浩生
YAMAGATA Hiroo 訳 <http://cruel.org/freeware/cathedral.html>

なかでも、とりたて、ガ分裂文

この主張は、実はブルックスの法則に反するものではない。複雑なオーバーヘッド総額と、バグへの弱さがチームサイズの二乗に比例するのは事実かもしれないけれど、でも重複作業からくるコストは、もっとゆっくりスケールする特殊な例でしかない。これにもっともらしい理由をつけるのは、そんなにむずかしくない。まずは、ほとんどのバグの原因となっている、計画外のよからぬ相互作用を防ぐのに比べれば、開発者のコード同士で機能の仕分けについて話あうのはずっと簡単だという、まちがいのない事実からも説明できる。

リーヌスの法則とハスラーの法則を組み合わせると、ソフトプロジェクトでサイズの段階が3段階くらいあることがわかる。小規模なプロジェクトでは（つまり開発者が一人からせいぜい三人くらいだろう）、リーダーとなるプログラマを選ぶ以外には、ややこしいマネジメント構造は必要ない。そしてそれを越えた中間くらいのところで、伝統的なマネジメントのコストがそこそこ低くて、作業の重複を避けたり、バグを追跡したり、細かい見落としがないかを調べるためのマネジメントがメリットをもたらすサイズがあるだろう。

でもそれを超えるとリーヌスの法則とハスラーの法則が組み合わさって、伝統的なマネジメントのコストと問題が、作業重複からの期待トラブルよりも急速に増えるサイズというのが出てくるだろう。このコストのなかでも無視できないのが、「目玉たくさん効果」を導入できないという構造的な問題だ。目玉が多いほうが（これまで見てきたように）伝統的なマネジメントよりも、バグの見落としや細部の見落としに対してはずっと効果的なのだ。だから大規模プロジェクトのケースでは、この2法則の組み合わせのおかげで伝統的なマネジメントのメリットは、ゼロにまで下がってしまう。

ノウアスフィアの開墾 (Homesteading the Noosphere) Eric S. Raymond 著 山形浩生 訳

<http://cruel.org/freeware/noosphere.html>

なかでも、とりたて、ハ分裂文

Linux 急成長の副作用として、新しいハッカーたちが多数登場したことが挙げられる。かれらにとって、主な忠誠は Linux に対してのものであって、FSF の目標はもっぱら歴史的興味でしかなかった。Linux ハッカーのもっと新しい波は、Linux システムを「GNU 世代の選択」と表現はするけれど、でもその多くはストールマンよりはトーヴァルズをまねがちだ。

しだいに、むしろ反商業的な純潔主義者たちのほうが少数派においやられていった。事態がどれだけ変わったかがはっきりしたのは、1998 年 2 月に Netscape 社が Navigator 5.0 をソースコードで配布すると発表したときだった。これは企業世界での「フリーソフト」に対する興味をかきたてることになった。これに続いてハッカー文化に対し、このかつてない機会を利用しつくすとともに、その成果を「フリーソフト」から「オープンソース」と命名しなおそうという呼びかけが行われたけれど、これに対しては即座にものすごい支持が得られたので、関係者はだれしもびっくりしたほどだ。

これをさらに補強する展開として、ハッカー文化のプラグマティスト部分そのものも、1990 年代半ばにはだんだん多心型になっていった。Unix/インターネットの根っこの株からは、ほかにも半独立のコミュニティが生まれるようになり、それぞれが独自の自意識とカリスマ的なリーダーを持っている。なかでも Linux 以降でいちばん重要なのは、Larry Wall 率いる Perl 文化だ。もっと小さいながらも重要なものとしては、John Osterhout の Tcl や Guido Van Rossum の Python 言語を取り巻く伝統が挙げられる。この三つとも独自の GPL でないライセンス方式を編み出すことで、イデオロギー的な独立性を主張している。

<http://cruel.org/freeware/noosphere.html>

補遺 2

談話における日本語分裂文に生起する取り立て詞「とりわけ」データベース

週間金曜日、(3/5 発売 257 号)、1999、株式会社金曜日
分裂文、ノハ分裂文、後項焦点、とりたて詞、とりわけ、代用表現、その

「風速計」 (3/5 発売 257 号)

生死——究極の「個人」問題

筑紫哲也

突き詰めていくと、結局は「日本人論」になってしまう——と言った人がいる。
脳死—臓器移植の問題に長らくかかわってきた人の言である。

その通りだと思う。が、そこに表出している、われら日本人の姿は到底すっきり
している

とは言いがたい。

日本人の心性は「ウェット」だから、という説明がある。人体をモノ、部品の
ように扱うのに抵抗があるという。それはそれでひとつの立場である。臓器移植という道
を遮断して、それを貫徹するという選択もある。

だが、そんなことはできっこない。

ウェットな心性は、国内で移植の道を断たれた患者が海外で手術を受けられたこ
とを祝福したり、そのための募金に応ずる方向にも働く。自費であれ、募金であれ、とに
かく豊かな者は

より機会に恵まれる一方で、その臓器を「供給」するために途上国では秘かに犯罪的で危
険な臓器売買が進行するなかで、その道を貫徹するには、そのような現実には目を向けな
いエセ・ヒューマニズムに立て籠もるか、日本人に限り、国内外を問わず移植を禁ずるか
である。だが、前者の立場に対しては「身勝手」との批判が高まる一方だし、後者の道に
対しては「日本人に生れたばかりに助かる者も助からない」という患者及び家族の怨嗟が
起きる。それに「ウェットな心性」がどこまで耐えうるだろうか。もともと、何事にも耐
えることができず、その場、その場で情緒的に反応するのが「ウェット」の正体ではない
か。

今回の高知のケースでも、法的脳死判定が手 間取ったことも加わって、「患者の
死を待ち望んでいるかのような報道」に非難が集中した。が、ある人の死が別の人の生に
つながると、脳死—臓器移植の残酷な本質をそれは示しているにすぎない。気に入らな
い悪い知らせをもたらした使者の首をはねたところで、事態は変らないのだ。

「死を待ち望んでいる」ような医療が行なわれなかったかを、とかく透明性を欠く
この国の医療体制に照らしてチェックするためにも、報道は不可欠だと思う。が、同時に
とりわけ問われなくてはならないのは、その報道がどこまでドナーのプライバシーを守り
得たかである。なぜなら、人の生と死ほど「個人」、つまりプライバシーの領域に属する問
題は他にないからである。だからこそ、脳死を人の死とするか、心臓死をそれとするかの
判断も、究極的には個人に属する。問題の多い臓器移植法といえどもこの判断の自由まで
は制約してはいない。その代り、脳死を死と認めない者も、脳死を死と見なしてドナーと
なる者があり、そのために一連の医療行動が起きることの「自由」は認めざるをえないは
ずである。

とりわけ、とりたて、は

定年まで五年を残して馬場は西部電力を退職し、コンサルタントをはじめた。電力の仕事は優先してまわすという条件で、独立をつよく勧められたのである。有り体にいえば蹴首されたのだ。

サラリーマンとして有能でないことくらい、馬場は自分でもわかっていた。だからそのことはそれほど衝撃でもなかったし、自尊心も傷つけられることはなかったが、顔をこわばらせて、妻が一週間ほど口を利いてくれなかったのだけは、いささかこたえた。

在職中の馬場の専門は、西部電力が造るダムに関連した地質調査だった。

炭酸ガス排出規制のせいで原子力発電の比重がおおきく増加し、それに比例して、夜間の余剰電力を有効に使うために、揚水発電の需要が急増した。原発は小回りがきかないのである。一度運転をはじければ、昼夜をとおして、おおむね定量を発電し続ける。

近年、とりわけおおくなったのは、海水の揚水発電である。

揚水発電用のダムは一日に一回、ダムの貯水の干満をくりかえす。昼間の発電で空になったダムに、夜のあいだ、下の海、あるいはダムから水を汲みあげて満杯にする。これはダムの地盤にとっては、真に過酷な条件だ。従来のダムにはない新しい条件である。それだけ、事前の地質調査が重要になってくる。

そういうわけで電力会社の〈地質屋〉の仕事はけっこう途切れることがなかった。

西部電力から地質調査の仕事が優先的にまわされてくるとはいえ、地質のコンサルタントで生計がたてられる確信はなかった。

博士号をとっていたので、食べられなくなれば、地元の短大か高校の先生の職をさがすつもりだった。

退職した途端、自宅のちかくの工業高校から副校長に招聘の話があったし、福岡の私立大学からも打診があった。

退職したとき、名ばかりだが役員待遇だったので、学校としては、就職の有力なコネになってもらおうという下心が、当然、あるにちがいない。もしかすると、そのほかの積極的な理由はなかったかもしれない。

夏のオリオン 西府 章 <http://www.k3.dion.ne.jp/~akiradzf/Orion1-6.htm>
とりわけ、とりたて、は、には

宏は夜昼なく働いた。機械の故障が夜昼を選ばなかったせいもあるが、それ以上に、仕事
が面白かったし、給与の良さもそれを後押しした。

二年半たった秋、十キロほど離れた山のほうで、道路トンネルの工事が始まった。

宏を気に入っていた年配の機械主任は、かれを連れてそちらへ移った。処理場の工事も
ちょうど一段落ついていたのだ。

その雪国のトンネル現場で機械主任は宏を準社員に推薦した。

それから二年ののち、かれは正社員になった。食べるもの、着るものをある程度選択で
きる余裕ができた。蓄えさえかなりできていた。

正社員になった年、下請けの事務所で働いていた近隣の娘と結婚した。

その現場が終わらないうちに、宏は上越新幹線のトンネル工事に配置された。工期四年
の比較的長い現場だった。

いつか修理工場を持つという夢があるため、現場の修理工場の備品の揃え方、配置など
にも人よりも何倍も気配りが利いた。すべては自分が工場を持つときの予行演習だと思え
ば、身の入れ方も違っていた。それが人目には勤勉で有能だと映った。とりわけ、現場の
所長と機械主任はかれを誰よりも評価した。

現在はダムの導水路の現場である。工期五年の長い現場だ。

年配の機械主任は定年で一旦退職して参与という肩書きになったが、実質はかれの上司
だった。かれからはまだまだ学ぶべきことが多かった。とりわけ部品や資材の納入業者と
の付き合い方と捌き方には正義と公正の筋が通っていて、見事だった。

「木山はおれの両腕だ」というのがかれの酔ったときの口癖だった。

とりわけ、とりたて、ハ分裂文、は

CD 時代が訪れて、子どものころ、近所の友人の家に毎日出かけてさんざん聴いた『Knock Me Out!』をもう一度聴きたくなり、あのモズライトのヘッドと、どこからどう見ても百パーセント純正 60 年代ガールというおネエちゃんに再会した。1980 年代終わりのことだ。これをきっかけにヴェンチャーズへの関心がよみがえり、いくつか編集盤に手を出した。それで止まらなくなった。ベスト盤ではお目にかかれない曲が欲しくなったのである。たとえば、友人に聴かせてもらっただけで、自分では買わなかった「Calcutta」「Never on Sunday」、LP でもってはいたが、ボロボロになってしまった、やはりオブスキュアな「Lolita Ya Ya」「Yellow Bird」といった曲である。

このとき、とりわけ CD で欲しいと思ったのは、Lolita Ya Ya である。わたしのまわりにはヴェンチャーズ・ファンがあまりいないからかもしれないが、だれかがこの曲に言及したのを知らない。だが、わたしは子どものころ、この曲を死ぬほどくりかえし聞いた。そして、いまこれを書いている 2000 年 8 月の時点でも、これはヴェンチャーズ全カタログのなかでベスト 20 に入るものと思っている。あとになって、なぜ子どものころにこのトラックにこだわったのかがよく理解できるようになったし、ヴェンチャーズを考察するうえでも、大きなヒントになってくれた。だが、Hawaii 5-0 は、わたしの頭のなかでは依然として忘れられた醜いアヒルの子のままだった。

...

ヴェンチャーズの影武者探しをやめて数年たった 1997 年秋、キャロル・ケイのウェブ・サイトに掲載された彼女のディスコグラフィーに「Hawaii 5-0」がリストアップされているのを発見した。

1969 年に感じた違和感は、28 年目にしてようやく解消した。ヴェンチャーズがプレイしていないのだから、あれをはじめて聞いた当時、ぜんぜんヴェンチャーズのように思えなかったのも当然だ。この時点ではベスト盤でしかもっていなかったが、あとで再発 CD を聴き、たしかにアルバム全体がキャロル・ケイであり、さらにつぎのアルバムも同様のメンバーで録音されたと推定できると結論した。これにて一件落着。

しかし、回答というのは、しばしば新たな疑問を生む。ハリウッド研究には、いくつかの標語というか、不変の定理のようなものがある。とりわけ役に立つ原則は「ゴキブリは単独では存在しない」というものだ。1 曲でも、スタジオ・ミュージシャンが影武者をやった曲が見つかったら、即座に全カタログを疑ってみななければいけないのである。まずまちがいなく、ほかにもそういう曲が（しばしば大量に）見つかることになっている。たいていの場合、アーティストはただのお飾りで、スタジオではまったくプレイしていなかったことがわかるのである。

<http://attic.neophilia.co.jp/aozora/htmlban/gyominkaitai.html>

とりわけ、とりたて、ハ分裂文

サイト決定

同じ一九六九年夏、北海道電力と国・北海道の三者による「北海道原発」の建設地選定作業は大詰めを迎えていた。有力候補地としていずれも日本海に面した三カ所が最後まで残った。島牧郡島牧村（しままきぐんしままきむら）と浜益郡浜益村（はまますぐんはまますむら）、それに岩宇（がんう）である。どこも漁業が中心の、過疎化の始まりつつあった地方だ。原発は陸の孤島につくられる——選定の結果は、そういう印象を人々に与えた。各地元の誘致派の人々もそう思ったに違いないが、口には出さなかった。

岩宇地方の人口はたしかに減りつつあった。

とりわけ極端な人口減少に見舞われていたのは泊村だ。村内で、それまで一〇〇年以上も掘り続けられていた茅沼（かやぬま）炭鉱*注 8 が一九六四年四月に閉山になり、坑夫とその家族およそ一〇〇〇世帯がきれいに流出してしまったからだ。漁夫がアルバイトでツルハシを握ることはあっても、炭鉱夫は簡単には船乗りにはなれない。漁業のほかに目ぼしい産業のない村に、残ろうとする人はいなかった。

人が減れば、需要も消える。泊村では、食料品をはじめあらゆるモノの流通量が激減した。ちょうど高度成長の真っ最中で、都会には働き口はいくらでもあったから、村を出て行く人々に躊躇（ちゅうちょ）はなかったと想像できる。当時の『北海道統計書』によると、六三年十月に八〇一八人だった泊村の人口は、その後のたった三年間で四四八二人にまで落ち込んだ。泊村の衰退は、岩宇のほかの町村にも直接・間接の影響を及ぼさずにおかない。茅沼炭鉱閉山前後の五年間で、岩宇四町村（神恵内・泊・共和・岩内）全体の人口は、いっぺんに一〇パーセント近くも減ってしまった。

ただ、岩内町の人口だけは、この期間も二万八〇〇〇人程度で暫増していたから、町民が過疎を肌で実感するのは難しかったかもしれない。もっともこれにしても、泊村の炭鉱離職者が、まだ働き口のありそうな岩内に移動したのに過ぎなかった。

ついに、岩宇に原発がやってくることが正式に決まる。電気出力三五万キロワットの軽水炉型発電施設を共和村（当時）と泊村の境界線近くの海岸につくる、という青写真が華々しく公表された。原子炉が共和村、冷却水の取排水施設は泊村である。建設費用は用地買収費を含めて二五〇億～三〇〇億円、地元漁家・農家への補償と合わせ総額約四〇〇億円、といった生々しい数字も明かされた。一九六九年九月二十九日、月曜日だった。

同日付け夕刊の『北海道新聞』社会面には、「“原子の灯”がともるぞ!」「役場ゆるがす“万歳”」と大きな見出しが踊っている。共和村の「喜び」をレポートした記事だ。

<http://attic.neophilia.co.jp/aozora/htmlban/gyominkaitai.html>

とりわけ、とりたて、ハ分裂文

内部分裂

立て続けの「ショック」によってとりわけ大きな打撃を受けたのは、それまで「漁業近代化」を順調に進めていた漁家たちだったが、どちらかと言えば「近代化」に乗り遅れていた沿岸漁業専門の漁師たちは逆に、一気に奈落にほうり込まれてしまうというような事態は免れた。つまり、同じ岩内の漁師であっても、相次いだショックによる「損害の程度」には大別すれば二ランクあったということだ。それが結果として、漁民社会を分断する下地となってしまう。

一九七五年八月、岩内郡漁協の総代や一般組合員約六〇人が「漁業と原発問題を考える会」という、いわば組織内組織をつくった。のちに「原発建設条件付き賛成派」と呼ばれるようになるグループだ。

実質的なリーダーは、そのころ総代長だった菱沼政雄（ひしぬままさお）さん（一九二九年生まれ、六十四歳）である。菱沼さんによるとしかし、あの時期に新しい会を旗揚げしたのは、少なくとも当初は原発賛成を主張するためではなく、ただ漁協執行部のやり方に疑問を感じたからだった、という。

「それはどういうことかと言うと、おおげさに言えば、迫害だな。組織を固めるために、執行部はそういうことをしだしたのさ」

自宅にくっついた事務所を訪ねて取材の趣旨を告げると、菱沼さんはすぐにこう説明し始めた。

当時、漁協執行部は「絶対反対」の姿勢を貫こうとするあまり、組合員同士の結束が緩むことを極度に恐れていた、と菱沼さんは言う。たとえば、組合員に対して、原発推進の商工会議所に加入している商店からはものを買わないようにせよ、という「不買運動指令」はかなり早くから出ていたが、それを強制する力が徐々に強化されていった。

補遺 3

談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞 *only* のデータベース

National Geographic, Sep. 1996: 85
wh-cleft, exclusiveness, only, it-cleft

NEAR THE POINT at which U.S. 160 crosses the San Juan River there is a sign that will direct you a quarter mile or so to an official monument. It is a large slab of concrete on the top of which are implanted the official seals of four states: Utah, Colorado, New Mexico, Arizona. The monument marks the point at which the corners of the four states intersect. It is the only place in the United States where this happens.
This is the Four Corners.

Sperber & Wilson, 1986, 1995, 121

it-cleft, only, focus, exclusiveness, exclusive adverb, that-clause, subject focus,

It should be stressed that in all these examples it is only the assumption explicitly expressed by the utterance that lacks contextual effects and is irrelevant: the fact that someone chooses to express an irrelevant assumption may itself be highly relevant.

Recanati, 1987, Behavioral and Brain Sciences 10: 729

cleft, it-cleft, relevance, subject focus, adverb, only, exclusiveness,

This theory I find very appealing. It is more explicit than most theories on the market; it accounts for hitherto neglected phenomena such as the communication of feelings and vague thoughts; above all, it is the only theory that both properly acknowledges the linguistic underdetermination of what is said and yet accounts for the hearer's ability to select a unique interpretation.

Halvorsen, 1978: 19

it-cleft, only, focus,

It is only the object noun phrase in sentences like (79a) that is in the scope of the verb.

The Daily Yomiuri, Tue. Feb. 25, 1997

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just, among other things

(29) a. MacWorld Tokyo 1997, in fact, looked more like an auto show thanks to an eye-catching Olympus display luring in unsuspecting men with the promise of bikinis.

What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac.

(The Daily Yomiuri, Tue. Feb. 25, 1997)

b. What they found, however, was only technology and innovation geared at the Mac.

?c. What they found, however, was just technology and innovation geared at the Mac.

??d. What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac, among other things.

Quirk, et al. 1985:611

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just, even, also, particularly, exclusiveness, exhaustiveness,

It was only/particularly/also/even John who protested.

補遺 4

談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞 *also* のデータベース

Quirk, et al. 1985:611

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just,even, also,particularly, exclusiveness, exhaustiveness,

It was only/particularly/also/even John who protested.

Headberg 1990: 203

it-cleft, cleft, also, exclusiveness, exhaustiveness,

(50)The rate of fatal heart attacks among middle-aged men increased steadily until the late 1960's, at which point it leveled off and soon began to decline. Not coincidentally, it was about that time that large numbers of men wised up to the harmfulness of cigarettes. It was also in the late 60's that more healthful food---specifically, foods low in cholesterol and saturated fat began to invade American kitchens. Since then, the average cholesterol level of adult males has fallen . . . [Jane E Brody, 'America's Health: An Assessment' The New York Times Magazine, 10/8/89, p. 42]

it-cleft, cleft, also, exclusiveness, exhaustiveness,

(51)It was the President in a rare departure from the diplomacy of caution who initiated the successful Panama invasion It was also Bush who came up with the ideas of having an early, informal Malta summit with Gorbachev and a second round of troop cuts in Europe after the fall of the Berlin wall. But it was Baker who subtly turned the Malta summit from the informal 'putting our feet up' chat initially envisaged by the President into a platform for the United States to demonstrate through a 16-point initiative that it was prepared to help Gorbachev P M. Dowd and T.L.'. Friedman 'The Fabulous Bush and Baker Boys,' The New York Times Magazine, 5/6/90, p. 64]

(52)Rough location work is nothing new for Sheen. When he was young, the family' y traveled to location with his father, actor Martin Sheen. They spent 16 months in the Philippines... Ten years later, Charlie Sheen found himself back in the Philippines... as the star of. . . Platoon The terrain and environmental elements...are very similar to Vietnam, including 120 degree heat by 8 a.m., blood-thirsty bugs and an impenetrable jungle. And to make matters worse, the Marcos government had just been toppled three days before the filming party arrived. It was also location work that gave Sheen his first acting break He was nine and his dad was filming The Execution of Private Slovik... [Jane Ammeson, 'Intensity fuels Charlie Sheen's On-screen Presence,' COMPASS Readings, Northwest Airlines Magazine, July 1990, p. 69]

Headberg 1990: 203

it-cleft, cleft, also, exclusiveness, exhaustiveness,

(53) These amusements were more common in the winter when inclement weather kept people indoors, and served to while away the long evenings between other social engagements. It was at this time of year also that the major villages were continuously occupied and ceremonies took place. As centres of ceremonial activity houses had ritual significance and were given sacred names... [People of the Totem]

Headberg 1990: 203

it-cleft, cleft, also, exclusiveness, exhaustiveness,

(54)Ironically, if it was the United States that appeared to be stalling the negotiations by making last-minutes demands. it was also Lee Thomas, the Environmental Protection Agency administrator, who took the lead in the talks a year ago when he called for a 95 percent phase-out of the man-made chemicals.

[Minneapolis Star & Tribune, 9/26/87]

補遺 5

談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞 *just* のデータベース

Daily Yomiuri, 7/24/97

wh-cleft, reversed wh-cleft, demonstrative, just, exclusiveness,

"Out in the Country" By Judy Pedersen

"When I was very small, we moved from our Brooklyn apartment to a quiet little New England town. My grandparents had given us land. 'Get out of the city,' they'd said, 'and build yourselves a house in the country.' And that's just what we decided to do."

Daily Yomiuri, (AP) July 26, 1997

wh-cleft, exclusiveness, just

Seles was not significantly bothered by the back stiffness that forced her to retire midway through a match at an exhibition in New Jersey last Saturday.

"I feel pretty stiff, but there was no pain and that was good," Seles said. "What I had was just my back stiff-ened up (last weekend). There was no injury or anything like that."

The Daily Yomiuri, Tue. Feb. 25, 1997

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just, among other things

(29)

a. MacWorld Tokyo 1997, in fact, looked more like an auto show thanks to an eye-catching Olympus display luring in unsuspecting men with the promise of bikinis.

What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac. (The Daily Yomiuri, Tue. Feb. 25, 1997)

b. What they found, however, was only technology and innovation geared at the Mac.

?c. What they found, however, was just technology and innovation geared at the Mac.

??d. What they found, however, was technology and innovation geared at the Mac, among other things.

Quirk, et al. 1985:611

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just,even, also,particularly, exclusiveness, exhaustiveness,

It was only/particularly/also/even John who protested.

補遺 6

談話における英語分裂文の焦点に生起する限定詞 *even* のデータベース

Fraser, 1971, 156

cleft, even, scope, exhaustiveness, uniqueness,

Cleft sentences provide another case, for no noun phrase functioning as the scope of even can be clefted.

(14) a. *It was even John who shot James.

b. *It was even a table she repainted.

c. *It was even at 5 p.m that the bell chimed.

(15) a. *It was Max who lost a dime and Harry did too.

b. *It was George who he called up and I did too.

(16) a. Only John shot James. (due to clefting)

b. Other people shot James. (due to even)

...

Notice, however, that an even may occur in a nonclefted part of a sentence.

(17) a. It was the lawn mowing that even I objected to.

b. It's that girl to whom I wanted to give even a second kiss

c. It was John that we must see even in San Francisco.

Quirk, et al. 1985:611

it-cleft, cleft, 強調, subject focus, only, just,even, also,particularly, exclusiveness, exhaustiveness,

It was only/particularly/also/even John who protested.

談話における指定文に関する総合的研究
－関連性理論，認知文法による考察－

課題番号 19520417

平成 19 年度－平成 20 年度科学研究費補助金
(基盤研究 (C) 研究成果報告書)

研究代表者 加藤 雅啓
(上越教育大学 大学院学校教育研究科教授)

発行日
発行者

平成 21 年 3 月 31 日
加 藤 雅 啓
上越教育大学大学院
学校教育研究科 言語系教育講座
〒 943-8512
新潟県上越市山屋敷 1 番地
TEL 025 (521) 3307
e-mail: masahiro@juen.ac.jp

印刷所

石黒印刷所
〒 943-0841
新潟県上越市南本町 2 丁目 6 番 27 号
TEL 025 (525) 8720